

---

# へたれ魔女と美少女勇者

Blackfruits

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

へたれ魔女と美少女勇者

### 【Nコード】

N5246L

### 【作者名】

Blackfruits

### 【あらすじ】

私の名前はなつ。

ある日友達のみつとゲームをしようと、ディスクを入れたらなにやらおかしい世界に飛んでしまった。どうやらそこはゲームの世界らしい。

自分達呼び出された理由は、「住民たちの安全を守るパトロール」というへんてこな理由——けれども本当の事情はそんなに簡単ではなかった。

いっぷう変わった不思議な世界で繰り広げられる出来ごと。

そして、なにより重要なのは――

「……どつちつてもどるの?」(byなつ)

## はちやめちや暴走スタート1（前書き）

この物語はフィクションです。

## はちゃめちゃ暴走スタート1

私の名前は、有栖川なつ。

まあ、性格は目の前にいる女性よりも合理的……だと思っている。

「なつ！ さあ、早く！ ゲームが私を待っている！」

目の前で騒いでいる美女の名前は、水川みつ。

肩くらいまでの黒い髪、長いまつ毛、ぱっちりとした二重の目、薄い唇——誰がみても確かに美女である。

彼女自身もそれを自覚しているが、彼女は『美女』と呼ばれることを嫌い、むしろ『美少女』と呼ぶように周りに推奨している。まあ、そんなのはどうでもいい。

「ゲームは逃げないでしょ、落ちついてよ」

「逃げるのよ！ この時間この分、秒！ それは今しかない！ もう17のなつは帰ってこないの！」

——何言ってるのこの人。

おかしい。いや、まあ今に始まったことじゃない。安心しよう。

「分かった、分かった」

私はそのまま彼女の部屋にお邪魔させてもらった。

部屋に行くと、様々なマンガのような絵が描いてある冊子が置いてあった。

なんだこれ、男の子が二人いたりするし。なんか妖しい雰囲気だし。あ、ここにもそこにも。

「私の宝物に触る時は手を洗ってね！」

——いや、誰も触らないけど。てか宝物をこんな食べ物からの側に放置しちゃだめでしょ、ねえ。

「すっぴんちい、おん！」

最新のP。3にディスクを入れ込んで（いつの間に！）、私たちはゲームが始まるのを待つ。

わくわくどきどき……な、みつほどきどきせずにゲームが起動するのを待つ。

……が、

ぷすん、ぷすん、ぎーがー、ぎーがー

と何やら変な音がしはじめた。

「みつ……なんか奇妙な音がするんだけど……」

「うん、それは思ったよ、なつ。どうしよう、リセットかけた方がいいの？」

「ええと……そういう問題なのかな」

不安は的中する。

だが、それは予想外のことだった。

突然、真っ黒な画面がまばゆい光を放ち始めた。

「ええ！？」

みつが隣りでうわわわと手をスクロールのように動かし始める。

——うわーどこかのライトノベルみたいにこれで異世界に飛んだら最悪ー。

焦りながらも私の冷静な思考が分析を始める。

こんな感じで私たちは意識を失った。

## はちゃめちゃ暴走スタート1（後書き）

連載を始めてみました。

ワードで書いて、載せて、と言った感じです。

完結してる作品ではないので、その都度その都度更新して載せて行こうと考えています。

コメディ色強めで前向きにw

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## はちゃめちゃ暴走スタート2

「とうとう、来ましたね」

わくわくしたような言葉が耳に入ってくる。

「うーん」と朝起きたかのように私は背伸びをした。

「あ！ 起きましたよ！ 長老！」

——長老？

ぼやけた瞳で、目の前にいる二人の男性をみやる。

一人は白いひげを生やした老人。もう一人はきらきらと少年のような瞳でこちらをみやる青年——耳に銀色のイヤリング（耳にかけ部分があるから恐らく）をしている——がいた。

「み……みつ？」

驚いた私が隣をみやると、みつが「うーん」と唸り声をあげて起き上った。

彼女は赤い図形の上にいた。私は……青い図形の上だ。

「なつ？ ロープレどうなった？」

——ロープレどころじゃない。

ここは一体どこだ。

辺りを見渡すと本がたくさん積まれた部屋の中みたいだ。

残念ながら（？）、みつの宝物とはほど遠いようだ。

タイトル『ほつきにまたがる空飛ぶじじい』、『目覚める大魔法使い』、『魔法使いに見られる脳の仕組み』……などなど、「魔法」と名のつく本が立ち並ぶ。

魔法……というか、ここはどこだ。

「みつ……ここどこ？」

「うーん……天国？」

天国に白ひげの老人がいてたまるか。

「おおおおお！」

突然老人が奇声をあげ始めた。

驚きのあまり私とみつは飛び上がる。

「やっとでてきてくれたのですな！ 異世界から来た勇者様と魔女様！ 苦節50年……ついに、ついに……」

そう言って老人はばたんと後ろから倒れ込んだ。

空を仰ぐような格好で倒れこんでいるのが妙に笑える。

「じいちゃん！」

じいちゃんて……『長老』はお前のじいちゃんかよ。……じゃなくで。

「あの、とりあえず説明してください。何がどうなってるんですか」

私の言葉にイヤリングを付けている青年は「はっ!?」とこちらをみて顔を背けた。

「やべえ……俺ってば魔女様に話しかけられちったよ……罪だよなあ」

——誰かこいつを殴る許可をください。

「ふっふっふ……読めたわ」

何か探偵にでもなったかのようなみつが、私の隣で不敵に笑った。

「つまり！ 私たちは勇者と魔女！ 世界を救う二人ってことよ！」

「すげえ！ さすが勇者様！ 何もかもお見通しっすね！」

——ねえ、本当に、なんなんですかこいつら……

「理由？ 理由はね、この私の勇者としての第六感が」

もう勇者確定かい。まあいいけど。

二人が打ちとけた（奇妙なテンションで）ところで、私は改めて

彼に訪ねた。

「それで、とりあえず説明してくれない？」

## はちゃめちゃ暴走スタート2（後書き）

みつが予想を超えて個性的になっていく……  
なつが予想を超えてドライになっていく……  
そんなこんなで続きます（笑）

読んでくれた方々に感謝をこめて。

### はちやめちや暴走スタート3

落ちついて起き上った老人と、青年はお茶をゆつくりと飲む。

「私が勇者で、なつが魔女。それは分かったよ。やっぱじゃあ勇者  
つてことは魔王を倒してくれってこと？」

老人は「とんでもない」と首を横に振った。

「魔王はものすごくいい奴じゃよ。恨まれるなんてことはありえん」  
私とみつは顔を見合わせた。

「じゃあ、なんで私たちが呼ばれたの？」

「うむ。この世界の問題ごとを解決するためにパトロールをしてほ  
しいんじゃないよ」

「……」

——それって異世界から人を召喚するほどのことなんだろうか。

話の全容は大体掴めた。

私とみつはこの世界のもめ事を解決するために召喚されたいらしい。  
赤い図形（魔法陣っていうらしい）から出てきたみつが『勇者』、  
私は『魔女』。

そして、もう一つ。やっぱここはゲームの中らしい。ただ、ど  
うやらこの世界の魔王はものすごくいい奴……らしい。

「はあ……ところで私たちどうしたら元の世界に帰れるんですか？」  
「うむ？」

老人は背後をみやって、ごそごそと何かを取り出した。

『召喚マニュアル』——とか書いてある。

「ええと……マニュアルに書いておらん」

——おい、こら。

「帰る方法は探すしかないみたいだね。なんか物語とかだと魔王を  
倒したら帰れるとかさ、ゲームクリアした時に帰れるとかあるよね」  
他人事のようにみつが笑いながら喋った。

ゲームクリアねえ。ん？ そういえば……

私はみつにこっそりと話しかけた。

「ねえ、みつ、なんていうゲーム買ったの？」

「んーとね、『異世界探索記』ってやつ？」

——異世界探索って……エンドなし？

「それって……どうしたらゲームクリアなの？」

「確か……一定のイベントをやっていけばクリアになるみたいなのとを説明書に書いてた気がする」

要は異世界でなんとかかんとか生きていけばいいってことだろうか。

「勇者様、魔女様、実は頼みが……」

「帰るための条件を教えてくださいるまで頼みは聞きません」

老人はぼくりと口を開いた。

「うつむ……その辺に關してはわしも調べておきますじゃ」

みつは「まあまあ」と私を宥めた。

「折角だからお話くらい聞こうよ」

「わかったよ……」

老人は白いひげを撫でながら喋る。

「この世界は大きく四つに分かれておる。一つはここ、魔法技術の発達した部分世界。もう一つは魔法技術のあまり発達していない部分世界。そして魔王の支配する魔の世界。どちらにも属さない世界があるんじゃ」

「四つの世界？」

老人は小さく頷いた。

「実はこのう、魔王は魔物と呼ばれるわしらとは違う異形の生き物の総帥なんじゃ。魔王がいるおかげで、そいつらは向こう——魔法技術の発達していない部分世界を襲うことは無く、むしろパトロールをしてくれる」

青年は「そうそう」と頷く。

「問題はこの世界じゃ。最近になって魔物でもない、奇妙な生き物がうろついておる。それがこちらの世界を襲っておるんじゃ」

みつは納得したように顔を動かした。

「だから私たちがパトロールするのね！」

「うむ。その生き物はなかなか強いのでう。さらに城で起こっているごたごたとか隣りの夫婦の離婚騒動なんかも解決してくれれば最高じゃのう」

そんな法的解決も求めるんですか……と私は心の中で突っ込んだ。みつはすつくと立ち上がった。

「この美少女勇者みつにまっかせなさーい！」

「おお！ 頼もしい！」

——絶対にノリだ。ノリで引き受ける。

私はため息をついた。

\*\*\*\*\*

暗闇を照らすうつすらとしたランプの光。

「……管理責任を問うべきだったな」

目の前にたたずむ優美な影に、耳まで裂けた口を持つ異形のもの  
が膝（と思われる部分）をつく。自分はどこまでも従順であること  
を示す必要があった。

「申し訳ありません。ですが、この付近にはいないようです。これ  
から私の部下を」

「必要ない」

影はくつと口角をあげた。

「対策はすでに講じている。それに関しては問題はないだろう……  
恐らくな」

その言葉に膝をついているものは顔をあげた。

自分の報告以前にすでに対策を講じているのだとしたら、よほどの  
策略家だ。それに……ああ、まさか。

答えの代りに影は笑った。やはり敵わない方だ。

「引き続き情報収集を命じる」

「御意」

深深と頭を下げる。我が君へ――

### はちゃめちゃ暴走スタート3（後書き）

ちよっぴり動きだしてきました……多分。

世界観が思ったより壮大に……！

ぐるぐる回って手を離れちゃうくらい動き回ってほしいかな

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## お姫様誘拐劇 1

「なんで、簡単に引き受けちゃうかなあ……」

「だってなつ、どうせ引き受けなきゃ帰れないよ？ それに私たちを呼べるってことはつまり魔法とか使ったりできるってことじゃない？ それって最高じゃん！」

みつは胸をときどきさせながら喋った。

「めんどくさくない？」

「相変わらず冷めてるなあ」

すいませんね。

そんな私たちの会話を聞きながら、銀色イヤリングをつけた青年はこちらをまじまじとみつめている。いや、正しく言えば私ではなく、みつの方をだ。

「いや……しかし綺麗ですよね勇者様って……」

目をきらきら輝かせながら（初めて会った時とはきらめきの種類が違う気がする）、彼はみつの方を見つめ続ける。

確かにその通りだ。みつは学校内の男子生徒の誰もが振り返るような美女だ。

もつと言えば町の男性もすれ違つては振り返るような美女だ。

しかも、どこか儚い感じがする美しさだ。中身を知らない者からみれば。

「うん、まあ九割そう言われるかな。でも私は美女じゃなくて、美少女なんだよね。まだ未成年だからさ」

そう言ってみつはくすくすと笑った。

こういうやり取りをみると『悪女』にみえなくもない。

自分を綺麗だということを彼女は知っている。事実それを自分も認めている。その物言いに、クラスの女子には嫌悪感を持っている者もいる。

でも、これが彼女の悪気のないところであることは、付き合いの

長い自分が知っている。

「じゃあ美少女勇者つすね！ 美少女勇者にへたれ魔女。どっかの文献のタイトルとおんなじつすよ」

——へたれ魔女つてもしかしなくても私のことか……

わざとらしく咳払いをしてみせる。

「ところでさ、私魔女っていうからには魔法とか使えるの？ 全く魔法とか使ったことないんだけど……」

「えー？ 魔法使ったことないんつすか？」

青年はひどく驚いたような顔をみせた。

みつと私は顔を見合わせる。

「使ったことないっていうか……魔法自体存在しないからねえ。ええと……あれ、そういえば名前聞いてないや。名無し君」

「ああ、忘れてました。俺の名前はエウレアっす。そういや二人の名前も聞いてなかったつすね」

青年——エウレアに向かって軽く頭を下げておく。

「有栖川なつ。なつでいいよ」

「水川みつだよ。みつでいいよ」

「みつになつか。そっくりな名前！ ええと……それで魔法使ったことないって話だったつけ。ううん、そうだなあ」

それまで文献を読み漁っていた長老は顔をあげた。

「ふむ。異世界では魔法が無いという話は、聞いたことがあったが本当とはのう……それならば、城の魔法養成員に話を聞いて学ぶのが良いかもしれんな」

「あれ？ 長老が教えればいいんじゃないっすか？」

「わしゃもう歳じゃ。忘れとるわい」

——忘れてんのか……

「城の養成員に事情を書いた手紙を記述するかの。ちょっと待っておれ」

かくして私たち二人は、魔法やこの世界について学ぶために城に向かったのであった。

「ほわゝ、大きい」

童話かおとぎ話に出てくるのではないかというような、少し淡色系に彩られた街並みが並ぶ。その中でも一際大きいのが目の前にある城だった。

「やつぱり……お城だよな」

みつが感激のあまりわけのわからないことを言い始めた。

だが、訳が分からなくなるのも仕方がなかった。

「やつぱり異世界なのね……」

「そうだよー、こんなの一生に一度お目にかかれるかどうかだよ？  
もっと楽しまなくちゃ！」

一生に一度どこかお目にかかる方が不思議ではある。

私は手渡された地図を開く。

「えゝと……魔法の養成はお城から少し離れたところにあるらしい。  
あ、あの高台みたいだよ」

指差した向こう側には、街並みがよく見渡せそうな、少し高めの山の上。

鮮やかな緑の葉が風にほんの少し揺れ動いている。

「行こうか」

「うん！」

みつが今にも跳ね上がりそうな上機嫌で歩み始めた時だった。

「どいてくれ！」

突然大きな声で誰かがこちらに向かって走ってきた。

慌ててみつの腕を引っ張ってそれを避ける。

がっしりとした胸当ての重さも関係なく、風のように青年は走っていく。

「あ、あれって、ナイトってやつ！？」

「さあ……それよりどうしたんだろうね」

ざわざわと周囲がどよめく。

人当たりの良さそうな、肉づきのいいおばさんがこっそりと私たちに喋った。

「なんでも、城のお姫様が誘拐されたいよ」

## お姫様誘拐劇1（後書き）

……自分の文才の無さに泣けてきます；  
もうどこまでも突っ走れー、って感じですよ。  
温寒コンビはさらに暴走していきそうですw  
それでは。

読んで下さった方に感謝をこめて。

## お姫様誘拐劇 2

どんどんと野次馬が増えてくるのをみつめながら、お姫様はどういうものなのかちよっぴり興味を持つ。

まあ……私みたいな凡人には縁の無い人なんだろうけど。

「行こうか、みつ。私たちがどうにか出来る問題じゃないし」

「ええ？ こういうのを何とかするのが私たちの役目じゃないの？」

「だって、勇者様は剣を持ってないし、魔女は魔法を使えない。そんなんじゃどうにも出来ないでしょ」

「うつん……あつ、そうか！ 魔法を覚えてから救いに行くのか！ さすがなつ、あつたまいい！」

……別に助けに行くとは一言も言っていない。

だがとりあえずはそういうことにしておいて、私たちは魔法の養成の場所があるらしいところまで歩く。

木製らしい建物が年季を帯びた様子で立っていた。

外装としては古い学校の校舎みたいな感じで、ここだけは城下町や城とは一線を画している様な気がした。

私たちを出迎えた老人とはまた雰囲気異なる老人が現れた。

歳は……同じくらいだろうか。だが鋭い瞳が切れ者の様な印象を与えた。

「あの……これを」

老人は手紙を受け取って素早く一読した。

信じられない様子で一瞬眉をあげてこちらを見た後、小さくため息をついた。

「事情は分かった。本当に召喚に成功するとは、なかなか信じがたいがね。……だが今はそれどころではないのだ」

老人は遠くに視線をやる。

「知っているかもしれんが、昨晚城の姫君が誘拐されてな……私もこれから城に向かわねばならんだ……」

「はあ……」

それから彼はこちらをちらりとみやる。

「まあ、お前たちが解決してくれたら一石二鳥ではあるんだがな」

「……」

お姫様を助けなきゃ、魔法の養成も無理らしい。

「そりゃ、助けられるなら助けたいんですけど……魔法も使えないし、剣も持つてないし。何が出来ののかなあ……」

みつがぼつりとつぶやいた。

老人はふうむと考え込む様な仕草をみせた。

「それならば……とりあえずは一緒に城に向かわぬか？ 剣の稽古ならば城の騎士にも聞けようし、あそこならば剣も借りられよう」

それが一番いいのかもしれないな。

私とみつは頷いた。

みつはほんの少し楽しそうな微笑を浮かべた。

\*\*\*

真つ赤に敷かれたカーペットの上を、老人の後に続いて恐る恐る歩く。

「王様、ただいま参りました」

「おお……ドウラ。ちようどいい。……む？」

細い目をしていて白いひげを生やした王が、不思議そうにこちらをみやった。

「こちらの二人は勇者みつと魔女なつ。召喚魔法が成功したようです」

王は驚いたようにまじまじとこちらをみやった。特にみつの方を凝視する。

「ほう……ふむ。なかなかいい女じゃな。側室にしても良いくらい……」

「おっほん!!」

「じよ、冗談じゃよ……王妃」

白いレースのドレスを纏った、綺麗な長い金髪の女性——王妃らしい——がざろりと王を睨んだ。

「召喚魔法の成功とは……信じられないことではありますが、そうですかとうとう……それで……そちらの二人が今回の問題を解決してくださるのかしら？」

とても上品さを感じさせる佇まいで王妃はそう言った。

「いえ……それがこの二人はまだ見習いで、魔法の習得や剣術の修練をつんでいないようでした。城の兵士たちの訓練場を拝借したいと思い連れて参りました。ですが、勇者と魔女のたまご。協力できるところは協力したいと申しております」

みつが頷いた。

まあ……それがいいのだろう。

「そうですね。よくぞこの城に参られました。私はティアナ。この国の王妃です。では、お二人にも話しておくのがよろしいでしょう」「そうそう」と隣の王にほんの少し厳しい目を向けて（こころなしか王様が小さくなったような）、王妃は話す。

「こちらはサウレンア王。しっかりしてくださいな」

「う、うむ」

この国ではどうやら王よりも王妃の方が権力が強いらしい。

「実は昨晚姫が何者かに連れ去られてしまったのです。私も王もそれを目撃したわけではないのですが、側にいた召使いと騎士が目撃していました。あの子は隣国の王子との婚約を控えているのですが……」

そこで王妃は肩をすくめた。

「誘拐されたというのは出来れば内密にしておきたいこと……婚約に支障がでは困るし、何よりあの子の身が心配です。そこで、私たちは騎士や魔導師たちに協力を要請しています」

「魔導師というのは簡単に言えば魔法を扱う者のことだ」

魔法養成の老人が小さな声で私たちに説明してくれた。

「娘を誘拐した者は、顔に傷のある男と聞いています。出来ること  
とならお二人も協力してください。もちろん、礼は致します」

みつは大きく頷いた。

「分かりました！ 協力できることはしたいと思います」

私も小さく頷く。

王妃は微笑んだ。

「ありがとう」

それからほんの少し遠慮しながら、みつは小さな声で王妃にお願い  
事をした。

「あの……兵士さんが使っているって言う剣の訓練場に行ってみた  
いんですけど……」

「それならば許可を出しておこう。好きに入るがよい」  
それまで黙っていた王が喋った。

「ありがとう！」

花が咲いた様なみつの笑顔に、王の顔が崩れた。

「王？ 鼻の下が伸びていらっしやるようですね？」

王妃の言葉に王がはっとしたように小さくなった。

——この国……大丈夫なんだろうか。

## お姫様誘拐劇2（後書き）

登場人物が多いと名前を忘れそうになります。

私の場合、名前に關してはいつも突発的につけていますが……みんなどんな感じでつけてるんしょう？

なつは相変わらずドライ。みつは意外な面が明らかになりそうです。一つの部分の話がどれだけ長くなるかは全く予想なしに書いてるのでどれだけ長くなるかが分かりませんが、がんばりますw

読んでくださった方々に感謝をこめて。

### お姫様誘拐劇3

室内の訓練場と外の訓練場——中の訓練場に入ったみつは、側にあった木刀を手にした。

「稽古つけてもらっていいですか？」

みつはにっこりと笑ってそう言った。

兵士の一人が周りに促されて前に出る。

私と老人はその様子を見守ることにした。

「はじめ！」

合図とともに気合を入れて兵士が向かってくる。

みつはそれを木刀で受けて、それから後ろに下がって——

「めんっ！」

大きく叫び、一瞬の隙をついた。

ばしいっ！ と音を立てて、兵士の頭に木刀が当てられた。

「……な」

兵士が絶句したように固まった。

みつは得意そうな笑みを浮かべた。

「なんと……っ！」

老人が驚いたように声を出す。

そう——みつは剣を持っていない、とは言った。

でも一言も剣を扱えないとは言っていない。

みつは剣道の技術を持っている。

部活にこそ入っていないが、彼女の父親が剣道の師範代だった。

「へえ、やるじゃないか」

背後から声が聞こえた。

振り返ると、身の丈近くの大きな剣を背負った男性が不敵な笑みを浮かべていた。彼は軽く目を吊り上げてみせた。

「あんた、召喚された勇者様なんだって？ 女子供だから剣の扱いも知らないと思っていただけ、基礎は出来てそうだな」

みつは男をみやって首を傾げた。

「おっと、自己紹介が遅れちまったな。俺はウィング。……騎士団隊長だ。手合わせ願おうか」

見た目には意外と若く見えるが……彼が隊長？

驚いて老人——ドゥーラをみやると、彼は「うむ」と頷いた。

みつは微笑した。

「……みつ」

多分私が見る中で、これが彼女の『本当の』笑みといえるのだろう。

みつは顔立ちが整っているし、どんな笑顔だつて様になる。……でも、本当の笑みは顔だちが整っているせいでほんの少し冷たく見える時がある。

「ふむ。まあこれくらいでよかろう。それよりお主に関してじゃが、わしは城の書斎で少し文献を調べてこよう。お主にも魔法を教えようと思うのでな」

「はあ」

唐突に言われて曖昧な返事をしてしまった。

「本当なら一緒にきてもらいたいんじゃないが、その他にも色々と用があつてな」

私はみつの方をちらみする。多分こちらは問題ないだろう。

「じゃあ、ちよつと街の方をみてみようと思います。お姫様のことも聞き込みしてみます」

「それは助かる……む？　待て、聞き込みはまずい。事は内密に済ませておいた方が」

「でも街の人は知ってるみたいでしたよ？」

「……」

私の言葉にドゥーラはちよつぴり固まった。

「な、なに？」

「……ご存じなかったんですか」

ドゥーラは考え込むように一時黙りこんだ。

「そうか……ううむ。まあ良い。だがあまり大っぴらな聞き込みは差し控えてくれ」

「はぁ。分かりました」

ついでに心の中で「あまり期待はしないでくれ」と追加しておく…… 勿論心の中だけであるが。

\*\*\*

城から出て、とりあえずは街を手当たり次第にぶらぶら歩く。

なつは大きなため息をついた。

別に勇者だの魔女だの、乗り気なわけじゃない。でも、こうなると自分が足手まといな感じがする。 出遅れた感があると言つか…… 足取りは自然と街の隅の木々の側に向く。 心の声が聞かれるのを拒絶しているみたいなさな感じで――

なんだろうな…… 劣等感？

この感情を表すとすれば、近いのかもしれない。

なつは顔をあげた。

すぐに目を見開いた。

―― あ…… あれ？

奇妙な感覚が手足を襲った。 紙を気持ちのままにぐしゃぐしゃに丸めこんだように、視界が一瞬揺らいだ気がした。

すぐ背後でさあつと風の音がした。

ゆっくりと振り返る。

風に舞い散る木の葉が、まるでそこにいる者を引き立てるように散っていく。

すらりとした身長に真っ黒な瞳、同じ色の髪。

―― 何より、圧倒的な存在感。

あつという間に街並みが、厚紙で作られた背景のようにうつすっぺらくなってしまった。

彼は音もなくこちらに近づいた。

チリン……と鈴の様な音が鳴った気がした。

「……何を、隠しているんだろう」

穏やかだけど聞き逃すことの無い声が耳に入った。

「え……」

下から窺う様な態勢で、彼はこちらをみやる。

「魔法を使えない魔女……」

ぽつりとつぶやかれた言葉に、自分が召喚されたものだと知っているのに気付いた。

「本当に……そう？」

——何を……この人は、何を言ってるの……？

ぞわりと全身に鳥肌が立った。足元がふらつく。

チリン、と鈴のような音が鳴った気がした。

彼は私の様子をみて、微笑した。

「……またね。なっさん」

目の前に開かれた深いトンネルを目にした様な……変な気分だった。

### お姫様誘拐劇3（後書き）

若干コメディ色が少なかった気がします。

お姫様がまだ出てこないのは……次回は出せる、かな（汗）  
話の長さがどうなるか予想がまったく付きませんがのんびりいこう  
と思います。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

#### お姫様誘拐劇 4

「ま…… 負けた」

みつは悔しそうに唸った。目の前の隊長は余裕の表情のまま立っていた。

「結果的には、な。でも筋はよかった。これから伸びる」

彼の賛辞を聞いて、みつの悔しさが小さくなった。

「むっ……」

そう言われただけでも励みにはなる。うん、とっても。

「これから稽古とか頼んでもいいですか？」

「ああ、請け合うよ」

「よっしゃ！」と心の中でガッツポーズを浮かべて、みつは飛び上がった。絶対強くなつて見せる。

「あ…… そうだ。あの、ウイングって街の中を走っていたんだよね？」

「街の中を走ってた？ …… ああ、あの時か」

すっかり忘れていたが、街の中を風のように走り去っていたのは、彼だった。

本当にすっかりすっぱり忘れていた。

「あの時は急いでいたんだ…… 本当に」

どこかはつきりしない表情にみつは首を傾げた。

ウイングはちらりと周囲を窺ってこちらに手招きをした。

「あまり大声で言わない方がいい、ここだけの話なんだが。今回の姫様誘拐事件のことだ」

「はあ……」

「実は……」

耳打ちされて聞こえてきた言葉にみつは言葉を失った。

「…… え？」

——意味が分からない。

なんだっただらう。でもあまり深く考えない方がいい気がする。考えたくない。いや、考えちゃだめだ。

半ば自分に言い聞かせるように、なつは街をあてもなく歩く。

「そこのお嬢ちゃん、焼きたてのパンはいらないかい？」

ふと顔をあげるとどこかでみたことのある顔がみえた。ふっくらして人当たりの良さそうなおばさん——あの時話してかけてくれたおばさんだ。

「あ……」

すごくおいしそうなまん丸のパンが置いてある。お腹すいた。でも……

「すみません……私お金持ってないんです」

「あれ、珍しいね。今時そこら辺の小さな子供でもパンを買うくらいのお金は持つてるのに。でも、いいわ。売れ残りだけど一個あげる」

おばさんが人の良い笑顔と共にこちらにパンを渡してくれた。

「おいしいよ。焼きたてだからね」

「ありがとうございます……」

パンをほおばりながら、ふと考えたことを尋ねてみた。

「あの……おばさんはお姫様が誘拐されたことを知っているんですよね」

「ああ、その話ね。みんな大っぴらに口に出しては言わないけど知っていることだよ」

「でもね」とおばさんは続けた。

「お嬢ちゃんはこの国の人じゃないのよね。私たちもみたことがないし……だから言っていないことじゃないかもしれないけど」

「あの……私は城の……魔法使い見習いです。また来たばかりなんですあまりよく分からないんですけど」

「あら、そうなの？」

おばさんの顔がぱあっと明るくなった。

機転を利かせていったつもりだけど、よかったのかどうか。

「よかつたら知っていることを聞かせてくれませんか？ 絶対おばさんから聞いたことはいいませんから……」

「あのね……これは暗黙の話なんだけど……私たち街の者は、実はたまにお姫様と男の人が一緒にいるのをみたことがあったの」

私は驚きに目を睜った。

「それって……」

——もしかして。

「顔に傷のある男の人よ。姫様は多分お忍びで街に降りていたんだと思うの。その男の人と一緒にね」

顔に傷のある男の人が一緒だった……その人は、誘拐犯。

それって……もしかして——

\*\*\*

ほとんど自分がみたことがない世界。

古びた木製の建物がひゅうひゅうと風の音を立てる。

「……アーレイシア」

左頬につけられた消えない傷——自分を助けてくれた時についた傷の痕。

何度それをみて罪悪感を感じたか。でもそれ以上にいつだって……  
「本当に、いいのか？」

——貴方を、愛していた。

「私の気持ちは変わりません。クー」

クールヴェリア——私の愛する人。

「どこまでもついて行きます。だって私は」

手を伸ばせばすぐ側に触れられる場所にいる。これからもずっと側にいてほしい。

「あなたが……好きだから」  
「いつだってそれだけが——私の支え。」

#### お姫様誘拐劇4（後書き）

お姫様がやっと出てきました。

最近は結構コメディ色がない様な気がします。

なんとかお話を続けて書いていけたらいいなと思ってます。  
では。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## お姫様誘拐劇 5

城までの道のりを先ほど聞いた情報を頭の中で整理しながら歩くなつは人知れずため息をついた。

——誘拐犯は、多分お姫様の想い人。ということは……駆け落ちよね。

城の中に足を踏み入れた途端、断末魔とも思える声が迫ってきた。  
「ななななななななつ！」

「うわあ！」

ぼんやりしていた私の腕をみつが素早く引いた。

不思議そうにこちらをみている兵士さんの間をはいくぐり、彼女は私を人のいないところに連れて行く。

「ど、どうしたの！　びつくりした……」

「聞いて聞いてよ、実はお姫様を誘拐したって言う男、お城の元騎士団隊長だったみたい！　つまり、顔見知りの犯行よ」

みつがまるで探偵のように指を差した。

「そっか。私も分かって事があるの。その騎士団隊長さん……お姫様と二人で街に来ていたんだって。それも結構親しい感じで」

私の言葉にみつが驚いたような表情をする。

「しかもお姫様って婚約が決まっていたんでしょ？　それって、駆け落ちしたってことじゃない？」

「か、駆け落ちって……！」

みつは両手を組んで一瞬恍惚とした表情を浮かべる。

「ロマンチック……」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ……」

私はがくりと肩を落とした。

みつは思い出したようにはっと目を開く。

「そうそう、あのね、もう一つウィングから聞いたんだけど、あの  
人お姫様とその駆け落ち相手の場所を突き止めたらしいの……うう

ん、というか」

ほんの少し口を濁しながらみつは言った。

「……誘拐された時、実はある程度事情を知っていたみたいなの。気の迷いがあったって言ってた。でも今日には二人を連れ戻しに行くって。だから……」

みつは考え込むように目を伏せた。それから顔をあげる。

「決めた！ なつ、二人を助けてあげよう！」

「え？」

みつの瞳がきらきらと輝いた。

「助けるって……どうやって？」

「まず王妃様に事情を話すの。それからお姫様とその誘拐した人と一緒にになれるように説得しよう！」

「説得って……」

啞然と口を開いた。

そりゃ、助けられるものなら助けたい。

でも、問題は個人だけじゃない。国と国の大きな問題がある。

「行くよ！ なつ！」

「え、あ、ちょ、みつ！？」

思い立ったら行動、みつは私の腕を引いて城の中に入ってしまった。

王妃は難しい表情で黙っていた。

みつが事情を話したところで、王はかんかに怒っていた。

「何を考えておるのだ……！ 王族としての役目を忘れてそのような者にうつつを抜かすなど……これでは隣国の王子になんと申し開きできよう……」

だが、王とは対照的に王妃は黙っている。

私は思い切ってきてみることにした。

「あの……王妃様。もしかして、王妃様は知っていたのではないですか？ お姫様とその元騎士団隊長のことを」

「……なぜ、そう思うのです」

王妃は静かな瞳でこちらをみつめた。

みつもちらをみつめている。

「王妃様はお姫様をさらった方が顔に傷のある男だと言いました。私の勝手な考えですけど、顔に傷のある男の人なんてそうそういない気がするんです。だからもし、顔に傷のある男がさらったという報告を聞いたなら、一番最初に思い浮かぶのは城にいた人のはずでしょう?」

王妃は目を伏せた。

「王妃、そうなの?」

サウレンア王の言葉に王妃は小さく頷いた。

「その通りです。顔に傷のある男と言う報告を聞いて、私も王も、クールヴェリアが誘拐したのだと判断が付きました。言わなかったのは、それが一時城でいた者だというのを伏せたかったから」

王妃はいったんそこで言葉を切って、続けた。

ほんの少し困ったように王の方をみやる。

「……あの子がクールヴェリアを慕っているのではないかというのは、口に出さずとも見ていれば分かります。私はあの子の母親ですから」

「ならば、なぜ黙っていた!」

王の叱咤に、王妃は反論するように声をあげた。

「王、確かにあの子には王族としての責任が足りないかもしれませんが、でも私たちにも心はあるのです。私が王の元に嫁いだのも……いささかも迷いや不安がなかったとお思いですか? あの子の気持ちに分からないではないのです」

王妃のまっすぐな瞳に王はほんの少し黙りこんだ。

「あの子の行動の責任は母親である私の責任です。……罪は私にもあります。事が収まってそれでもお許しになれないのならば、私をお裁きください」

王は小さく肩をすくめた。

「……それで全てが収まるほどに問題は簡単ではない。隣国の軍事

力は我が国よりも高いのだ。この縁談がまとまらねば我が国は終わりではないか」

深刻な空気を撃ち破ったのは、なんとみつだった。

「はい！」

彼女は思い切り手を挙げた。その場にいた全員が目を丸くした。

「つまり、隣国の王子様が納得してくればいいってことですよね？」

……何を言い出す気だ、この子は。

なつはだんだん不安になってきた。

「隣国の王子様を説得できればいいんですよね？」

なつは啞然とした。

王妃と王は顔を見合わせた。

「……策があるのか？」

「ありません」

そんな、きつぱり……

「でも、お姫様とその人が本当に好きなら一緒にさせてあげたい。可哀想なもの。だから、説得しに行ってみようと思うんです」

王と王妃の表情が曇った。

「それは……無謀というものだ」

みつは私の方に向き直った。ほんの少しこちらをじっとみやった。  
「……？」

彼女はもう一度王と王妃の方に向き直る。

「王様、王様は側室とかいっぱいいるんでしょう？」

「む……む、うむ」

何故だかほんの少し口を濁らす王様。

「王妃様、王妃様は王様が好きですか？」

王妃は一瞬王の方をみやった。

「……ええ」

「なら、王様は王妃様のことがどれくらい好き？」

王妃の視線が王に突き刺さった。王はほんの少し戸惑いながら答

える。

「どれくらい、とは……難しい話じゃな」

王妃の表情がほんの少し不安そうになる。王は王妃をみやった。

「……どれくらいとは言い表せんよ。王妃なくして私は成り立たん」  
「それなら、お姫様の気持ちも分かるはずです」

みつの言い分を考えているのか二人は黙った。

——珍しい。みつがこんなに熱心になるなんて……

「それに、困ってる人を助けるのは私の役目でしょう。私一応勇者  
みたいだし！　ね、なつ！」

みつが満面の笑顔でこちらをみやる。眩しいくらいに綺麗な笑みだ。

……はあ。負けた。

私は王と王妃をみやった。

「縁談だけが和平の道ではないかもしれません。説得やその方法を  
出来得る限り探してみようと思います」

みつをちらりとみやる。

「……勇者が言うんだから仕方ありません」

これだけは小さくつぶやいた。聞こえたのか聞こえてないのか、  
彼女は「うんうん」と頷いた。

「……分かりました。任せましょう。王、後は貴方の判断に従いま  
す」

王妃の言葉に王はため息をついた。

「……任せよう。だが他に和平の道が見つからぬ時は、彼女を嫁が  
せる。事情はどうあれ、国と国の問題だからのう」

王妃はほんの少し微笑した。

「王……ありがとうございます」

「お前が礼を言うことではなかるう、王妃」

王も弱弱しく微笑した。

「仕方あるまい。……わしらの子なのだから」

## お姫様誘拐劇5（後書き）

思ったよりこの話は長かった！

でも、今回は思いがけずみっちゃん活躍したな～と思いました。

王族にも王族なりの悩みがあるんだろっな、と感じながら書いた話です。

次回も頑張ろう。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## お姫様誘拐劇6（前書き）

ちよっぴり残酷表現があります。  
苦手な方はご注意ください。

## お姫様誘拐劇 6

——隣国ツールとサウレンアを繋ぐ森。

現在は魔物とも少し異なる怪物が徘徊しているらしい。

とはいえ、「力も弱いし結構小さい怪物が多いから勇者様がいれば全然平気ですよー」という一兵士の言葉を信じて森の中を歩く。

ものの数秒でそれを後悔する羽目になった。

「……なにこの状況！」

叫ぶ、ひたすら叫ぶ。

それでも銅の剣を片手に無謀にも立ち向かおうとするみつを、なつは慌てて引つ張った。

目の前にはぶにゅぶにゅとした半径15センチメートルくらいの球体がいたのだ。目はにやりと（やらしい！）笑っていて、口がみょーんと真横に伸びている。

「ああ、こういうのがスライムかぁ」なんていうみつを（ちなみにあれはスライムより性質が悪い）、ひっぱたいて覚醒させ、ひたすら走る。

一匹だつたらきつと立ち向かっていけたのだろう。

だが目の前にいたのは一匹ではなかった。多分二十はいる。いや、もつといるかもしれない。「ぼによーん」なんて雄たけびをあげて、彼らはころころ転がってきた。

「何が勇者がいれば大丈夫よ！」

「でも嘘は言っていないよね、小さいし、いっぱいいるしね！」

「そつという問題じゃない！」

逃げる。ひたすら逃げる。

がさがさと草が揺れて、葉っぱが足元に絡まりつく。それでもそんなことを気にしている余裕は無い。

後ろを振り返ると、転がる彼らは次第にくつついていく。なんだか体が大きくなっていつてゐる気がした。

「あれって……何で出来てるんだろう」

私のつぶやきにみつが振り返る。

「粘着質だからボンドみたいなものかなあ？　すごいよねえ」

すごいけどもつと早く走って……

——いや、疑問を思わず口に出してしまった私が悪かったんだけど……

森を走り続けると、草も生えていないような広い場所にでた。

「……」

みつと私は絶句した。

「……何……これ……」

「ええと……ドラゴン……かなあ」

日に照らされて流れるように薄緑に輝く鱗が全身を覆っている。

かと思えば蝙蝠のような形の翼があり、ただしそれは蝙蝠のものと比べ物にならないくらいに大きい。その生き物は、ビー玉のような丸い瞳を細めた。

——竜……確かに、これはドラゴンだね……

でも言葉が出てこなかった。

ドラゴンはこちらを威嚇するようにみやった。

強烈な炎が一気に二人の体温をあげた。

「わああっ！」

「火、火い吐いたあ！」

幸い炎はあと一步のところで掻き消える。

「はわわわわ……」

驚きと焦りのあまり私とみつは手を取った。

——何が力も弱い小さい怪物だよ！　レベル1の主人公がレベル49の敵に遭遇するのと同じくらいの衝撃じゃない！

「ストップ」

慌てた様子でいるとどこからか声が聞こえた。

声のした先をみやると、それはドラゴンの後ろの方から聞こえた。すらりと伸びた身長に黒い髪、同じように真っ黒な瞳を持つ男性

がそこにいた。

こちらを威嚇していたドラゴンも声の主を視界に入れると、ごろごろと甘えたように喉を鳴らした。

「あっ！」

私が思い出したように声を上げると、彼はこちらを意外そうにみやる。

——あの時の不思議な人……

「……ここで会うとはね。勇者に魔女」

みつが不思議そうに首を傾げた。

「知り合いなの？ なっ」

「知り合い……というか……」

——謎な言葉を残した人……？

それでもあの時とちよつと違うのは、あの時の様な重々しい雰囲気が一気に消えているということだった。

——なんだか……この前とちよつと違う。

彼はふつと笑った。

「はじめまして。こんなところに何の用？」

「あ、どうもはじめまして。ちよつと隣国の王子様に用があるんです」

私は頭を押さえた。

今回ばかりはみつの適応能力が羨ましい。

「トールの王子？ ……やめといたら？」

「やめ……え？」

彼はほんの少し目を細めた。

「初めてのおつかいにしては、荷が重すぎると思うよ」

「お、おつかいじゃありません！ 大体、あなた誰なんですか？」

「ただの旅人。魔法使い……かな」

最後の言葉はほとんど聞き取れなかった。

「まあどうでもいいけど……これあげる」

男は私に小さな石ころのようなものを放り投げた。

「お守り。あんまり効果ないけど、持つと持たないでは違うから」

「は……はあ……」

ますます分らない。

彼はドラゴンの背にまたがった。もう一度こちらをみやる。

「それじゃあ、またね。みつさんに…… なつさん」

チリンつと胸の奥が鳴った。

どこか妖しい笑みを残して、彼は空へ飛び立った。

「すごい……ドラゴンかつこいいなあ」

みつがそうつぶやいた後、何かに気づいたように目を開いた。

「あれ？ 私たち、名前言ったっけ？」

——言っていない。

あの時会った時も……全く喋った覚えは無いのに——

「……行こう。よく分からないことは考えても仕方ないよ」

「ん？ うん。そうだね」

そういえば、と後ろを振り返ると、張り付いた小さな顔が「ぼによくん……」と寂しそうに鳴いていた。

「……」

私たちはひそかに顔を見合せながら、みなかったことにして先へ進むことにした。

\*\*\*

トールについたのは、あれから五分後のことだった。

サウレンアに比べれば原色に彩られた町並みだが、すごく静かだ。

「なぐんか……人がいないね」

「そうだね……」

「王子様話聞いてくれるかなあ？」

「ここまで来たんだから聞いてもらうしかないでしょ」

みつは不安そうに頷いた。

気合をいれて来たものの、不安なのは彼女も同じようだ。

サウレンアよりも広い道を歩くと、これまた巨大な城に着いた。

兵士が二人とも門に立っている。

「あの……」

声をかけたが彼らは反応しなかった。

「あの！」

それでも反応しない。

私たちは顔を見合わせた。

「入っちゃおうか？」

「うん……まあ、反応無いからしょうがないよね」

「赤信号、みんなで渡れば怖くない」という感じのノリで城に足を踏み入れた。

広い城内を歩いていると、一際豪華な扉に辿り着いた。いかにも王室という感じがした。

——なんだか……話と違って不用心な気がするんだけど……

みつは扉に力をこめた。

途端に、私の体に鳥肌が立った。

「……っ！」

ぞわぞわと恐怖に似た何かが上ってくる。

「みつ！ 開けないで！」

「え？」

——遅かった。

ドアはぎいっと音を立てて開いた。

——そこには、鮮血に彩られた王子の姿があった。

## お姫様誘拐劇6（後書き）

動きだしてきた……かな？

「お姫様誘拐劇」もクライマックスです。

ある程度の文のタイトルは作っているのですが細かい内容は決めているので、ここから次につなげるのに変更をするか、つなげていくか。

とりあえず、書き続けることが目標です。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## お姫様誘拐劇 final

呆氣にとられながら、みつとなつは立ち尽くした。

子供が絵の具で落書きをしたみたいに、粗雑な感じがする。これが自分が今みている現実だなんて到底思えない。

震えながらも、みつは少しだけ王子に近寄った。

反射的にか、なつの腕を引いて歩く。

その光景に目を背けてしまいそうになりながらも、なんとか正気を保つ。

王子の首筋に四つばのクローバーのような痣があった。

「謀反人だ！」

「！」

突然二人を取り囲むように兵士たちがばらばらと入ってきた。

「謀反人……！？」

なつの思考が急速に冴えた。二人は顔を見合わせた。

「謀反人って私たちのこと……？」

みつの言葉が遠くで聞こえる様な気がした。

——嵌められた……？

誰かが王子を殺害して、その罪をなすりつけた？

誰が……なんのために？

「ど、どうする……？」

鋭い刃の切っ先が一斉にこちらに向いていた。少しでも抵抗しようものなら、殺される。

二人は黙って震えているしかなかった。

だが——

「！」

突然なつのポケットがまばゆい光をあげた。ポケットから取り出すと、謎の男性からもらったお守りが光っている。

「なつ、それ……！」

叫んだみつの体が大きく歪んで光り輝く。何かに吸いこまれるように消えて行った。

驚いたなつの体もまた、吸い込まれるように消えた。

\*\*\*

サウレンア城では、事情を知ったクールヴェリアと姫——アーレイシアが帰還していた。

「姫をたぶらかす不届き者め！」

「お父様！ 話を聞いて！」

「何を聞くことがあるか！ 親不孝娘！」

「聞いてつてば！ この髭面！」

「ひ、ひげ……！？」

果敢なやり取りが繰り広げられる中で、ドゥーラは姫がどこでそんな言葉を覚えたのかちよっぴり気になった。

「王様……アーレイシアが悪いのではありません。裁くならば私を

……」

クールヴェリアの言葉に弾かれたようにアーレイシアが顔をあげる。

「違うわ！ クーが悪いのではないの」

「いえ、今回のことは全て私の責任なのです。王、どのような処罰も受けます。しかし、姫だけは」

「いやよ！」

二人のやり取りをみつめて、王妃は小さくため息をついた。

「処罰は勇者と魔女が帰って来てから決めます。それまでは……」

その時、急にまばゆい光が降り注いだ。

「何事だ！」

サウレンア王の叫びと同時に、ウィングが剣を構えた。

光はやがて二つの人影を生みだした。放り投げられるように、なつとみつが転がった。

「！」

一同は驚きに目を開いた。

「なつ殿にみつ殿！？ 一体どうやって……！」

「え？ え？ え？」

みつはきよきよと辺りを見渡した。

「ここは……サウレンア？」

唖然とした様子の一同をみやって、二人は顔を見合わせた。

「お前たち、どうやって……」

ウィングの問いかけにも二人は首を傾げるしかなかった。

「あなた方が勇者様に、魔女様？ トールの王子には会えたのですか？」

姫の問いかけに、みつとなつは顔を見合わせた。

ほんの少し戸惑いながら、二人は言葉を発した。

「王子様は……死んでました」

辺りが水を打ったように静かになった。

「……なに？」

王の問いかけになつが答えを繰り返す。まるでオウム返しのように。

「王子様は……死んでいたんです」

「どういう……ことです？」

王妃の問いにみつは不安そうな顔をみせた。

「分からないです。私たちが行った時はもう死んでいて……首元に  
変な痣があって……」

一同の顔が凍りついた。

「なん……だって？」

か細い声を出したのは、ウィングだった。

王と王妃は今まで見せたことの無いほどに真剣な顔をみせた。

「ドゥーラ、すぐにあなたのもとの魔法使いたちに召集をかけてください。見習いも全てです。ウィング、兵士たちもみな召集をけけなさい。緊急命令です」

王妃の言葉にウィングとドゥーラはすぐさま反応した。

王はみつとなつ、それからクールヴェリアとアーレイシアに向き

直った。

「お前たち二人の処罰は後回しじゃ。トールの王子が殺害されたとあれば、事は一刻を争う。お主たち二人はこの城から一步も出てはならぬ」

「お父様……」

みつは戸惑った顔をみせた。

「あの……何が……」

「事情はこれから説明します。二人とも、どうか力を貸してください」

緊迫した表情をみて、二人が断ることなど出来るはずもなかった。

## お姫様誘拐劇 final（後書き）

長くなりましたが、この章はようやくここで終わりになります。

次の章はどうなるか……予定と変わってきてるからどうなるか少し不安がありますが、次回も続きます。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 崩壊の余韻 1

トールとサウレンアを繋ぐ森に恐怖が満ちる。

怪物でさえある種畏怖を抱く力の持ち主は、音もなく歩く。  
踏み進んだ道は爆音を立てて、煌々と赤に染まる。

魔の手は確実にサウレンアに向かう――

「申し上げます！」

一人の兵士が憔悴しきった様子で入ってきた。

「城下町に火の手があたりました！ 現在魔導師とともに住民の逃げ道を確保していますが、こちらにも被害が来るのは時間の問題です！」

緊迫した空気が走った。

「……ウイルヴェール……」

サウレンア王は苦々しくつぶやいた。

「王様、王妃様！ 私が逃げ道を確保いたします！」

ウィングが膝をついて叫んだ。だが王は首を横に振った。

「不要じゃ。もはや手遅れじゃ」

「王……！」

サウレンア王は今までに無い厳しい表情でこちらをみやった。

「良いか、よく聞くのじゃ。わしはこの城に残る。そしてわしへの護衛は不要じゃ。団長ウィング、そなたは姫の護衛をせよ」

「王様！」

「聞くのじゃ！ もはやサウレンアは奴の手に落ちた。しかしわしはこの城の城主……けじめはつけねばなるまい」

「死ぬおつもりなのですか！」

サウレンアは苦笑した。

「無礼者め……わしとてそう簡単にやられるつもりはないわ」  
それから王は王妃に向き直った。

「そなたはどうする？ この城に残って同じ道を辿る必要はないのじゃぞ、王妃」

王妃は一時黙った後、首を横に振った。

「私も残りましょう。私は王妃……あなたの妻なのですから」

「お父様……お母様……」

愕然とした表情を向ける姫を視界にいて、王妃は微笑む。

それからゆつくりと彼女の側に近寄った。

「アーレイシア……あなたが生き残ってくればサウレンアは壊滅ではないわ。あなたはサウレンアの姫なのだから」

王妃は姫の頭をゆつくり撫でた。

「そしてもう一つ。これは王妃としてではなく、あなたの親としての言葉よ……もしあなたが生きる上で姫という身分が邪魔になるのなら、捨ててしまいなさい。あなたが幸せになることが私の一番の望みよ」

「……お母様……」

王妃は自分のネックレスを姫の首にかけた。

それからクールヴェリアに向き直る。

「あなたのしたことをすぐに許すことはできないでしょう。それでもあなたが本当にアーレイシアを愛しているというのなら……娘を守ってちょうだい」

クールヴェリアは恭しく膝をついた。

「……この命にかけて」

そうはつきりと言い残した。

王妃はやがて、勇者と魔女をみつめた。

「あなたたちも姫と共に同行してください。勇者と魔女とはいえ、まだ見習い……ここから逃げるのです。ドゥーラ、あなたも同行してください」

「……王妃様の命令とあらば」

戸惑いながら、みつとなつは声をあげた。

「一体何が起こってるんですか？」

王妃はほんの少し瞳を伏せた。

「トールの王子を殺したのは、魔導師……ウイルヴェール。数年前から話には聞いていたのです」

王妃の言葉を王が引き継ぐ。

「王族や他の者たちが次々と奴の手にかかっておる。その特徴に、奴は首に痣を残すのじゃ。闇の魔導師……とも呼ばれておる」

「ウイル……ヴェール……」

みつとなつは言葉を失った。

「さあ、もう時間が無い。ウイング、クールヴェリア、ドゥーラ……頼みます」

「王様！ 王妃様！」

姫とみつとなつは、引つ張られるように二人を後にした。

「……さらばじゃ」

小さな声が胸を悲しく打った。

——ちりん……

「……？」

ちりん、ちりん、と鈴のような音がする。

なつは後方を振りむく。

——誰もいない……

「なつ！ 急いで！」

「あ、うん！」

みつが自分の腕を引くのが分かる。

城の緊急の抜け道から森に出て、私たちは走っていた。

姫は悲しそうな瞳で遠くにみえるサウレンアを振り返った。

煙と炎に包まれながら崩れていく街並みがあった。

——どうしてこんなことになったのだろう……

ちりん、ちりと音が早さを増していく。この音は一体何？

急速に何かに引き寄せられるように、なつの視界が走った。

黒とほぼ同色に近いのではないかと思われる藍色の髪 of 青年がいる。

体は暗色に身を包んでいて、銀色のアクセサリーのような鎖が腰のあたりや手にもある。

「……」

彼はこちらに気づいて、冷たい瞳を歪ませた。

口元を吊り上げて笑う。

「はじめまして……」

彼は手でなつの頬に触れた。

面白いものをみるような、珍しい者をみるような瞳——なつの体がぞくりと震えた。

「だ……れ……？」

掠れた声を聞いて、彼は愉しそくに顔を歪める。

—— 怖いと思った。

「魔導師、ウイルヴェール・スヴァン」

「……！」

ウイルヴェール……？

—— この人が……

トールの王子を殺してサウレンアを手につけようとしてる人——

「お前の名は？」

恐ろしさに言葉なんて出てこない。

ずっと黙っていると、彼は私の胸元に手をやった。

「！？ あ、ああああ！」

焼けるような熱さに、喉が悲鳴をあげた。

彼はもう一度訊ねた。

「お前の、名は？」

自分の意志とは反対に言葉が喉を伝う。

「な……っ……」

「そうか、なつ。初めからそう答えればいい」

彼は刃物のような瞳をこちらに向けた。

「お前をもうぞ」

ウィルヴェールはもう片方の手を私に向けた。

だが、突然私の体がまばゆい光に包まれた。

急速に視界が引き戻されていく――

## 崩壊の余韻1（後書き）

最近コメディ色が消えてるような……？  
新章始まりました。

物語の方向性がある程度見える章になるといいなと思います。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 崩壊の余韻 2

「なつ！」

みつの言葉になつは目を覚ました。

みあげれば心配そうにこちらをみつめるみつの顔と、ウイングや姫たちの顔があつた。

「大丈夫か？」

なつは辺りを見渡した。

「ウイル……ヴェール……」

小さなつぶやきにウイングは眉をひそめた。

「い……居た……」

「なつ？ どうしたの？」

ドウーラがなつの顔を覗き込む。それから背後をみやった。

なつはもう一度つぶやいた。

「ウイルヴェールをみたの……」

全員驚いたように目を睜った。「冗談だろう」と否定しようにも、なつの青ざめた表情をみればそうとも言えなかった。

ドウーラが「ふうむ」と考えるようにつぶやく。

「意識が飛んだのかもしれない。稀にそういう魔法と同調したことが起こる者がいる。なつ殿はそうなのかもしれません」

「意識が飛ぶ？ では、なつさんは見てきたと？」

姫の言葉に彼は頷いた。

「今後はあまり後方に意識を集中しないようにしてください。ウイルヴェールに意識を飛ばして戻ってこれたことは奇跡ですぞ」  
彼の言葉になつの体にほんの少し鳥肌が立った。

——奇跡……

戻ってこれないのが普通？

なつが考え込んでいると、額にひんやりとした何かが当たった。冷たくて気持ちいい。

けれども、ぼよん、びちゃ、ぼよん、びちゃ……と変な音がどこから……

見上げると、にゅっと口が裂けた生き物がにこにここちらを見ている。

「うわあ！」

思わず大声をあげると、姫がびっくりしたように跳ね上がった。その拍子に生き物がぼよんと地面に落ちて、それからぴょんと跳ね上がった。

姫はそれを両手でキャッチした。

「な、な、な？」

クールヴェリアが頭を押さえた。ウィングが顔を引き攣らせながら姫に喋った。

「姫……また怪物を連れていたのですか」

「友好的なんですよ、この子。保冷剤にとってもいいんです」

「保冷剤！？」

なつとみつは思わず叫び声をあげた。

「名前はぴよんちゃん。ほら、ぴよんぴよん跳ねるでしょ？」

姫はスライム（に似ている）に自分の水筒を向けると、彼（彼女？）はにゆるにゆると中に入ってしまった。

「固体なのに液体……？」

なつは思わず目を疑いそうになった。

「ちなみにこの子たちってよくみると表情が違うんですよ」

——結構どうでもいい。

姫はにっこりとほほ笑んで見せた。

「さっきより顔色が良くなってきましたね。行きましょう」  
姫はなつの手を取った。

驚いて姫の顔をみやると、やはり微笑んでいる。

もう一方の手をみつが取った。

「……」

無言で少しだけ握り返す。

走りながら、なつは姫の手がほんの少し震えているのに気づいた。

\*\*\*

突然の来訪者に、青年——エウレアは面倒くさそうに肩を揺らした。

「わりーんだけど、師匠は今出かけてるんだよ。用件なら俺が聞く」  
来訪者は表情を変えることなく黙っていた。

「で、どうなんだ？ ウイルヴェール。何か用があったから来たんだろう」

ウイルヴェールは「ああ」と口の端を吊り上げた。

「召喚陣を貰いに来た」

エウレアは小さくため息をついた。

「召喚陣ね……そんなことだろうとは思ったよ。生憎渡すわけにはいかないんだよ」

ウイルヴェールの体が青白い光を帯びた。エウレアも自分の体内に巡る魔力を高める。

「奪うまで」

彼の言葉が合図だった。

青白い二つの光が互いの手から放たれた。

光の認識とは遅れてどおおんつと激しい音がぶつかり合う。

火花がばちばちと互いの顔の側を通っていく。エウレアは顔をしかめた。

「随分強くなったな……」

ウイルヴェールの余裕の表情を目の端に入れて、彼は苦々しくつぶやく。

以前もウイルヴェールとは力をぶつけたことがあった。だがあの時はこんなものじゃなかった。

今の彼の強さは尋常ではなかった。

「！」

彼の稲妻がエウレアのそれを食い破った。

敵わないのを認識してすぐに防御の体勢に入るが、体は一気に家の扉を破っていく。

「……っ！」

一拍遅れて前をみやると、ウイルヴェールが土足で家の中に入ってくるのがみえた。

よろめきながら立ちあがってその様子をみやる。

「召喚陣はどこだ？」

「……さあねえ。どこだろ」

ウイルヴェールの手がエウレアに向けられた。

「答える」

エウレアの喉元がぎりつと締め付けられる。痛みに顔を歪めながらも、エウレアはウイルヴェールを嘲って見せた。

「ぐ……っ」

——苦しい。

だんだん意識が失われていくのを感じながら、エウレアは目を細めた。

突然、どんっ！ と衝撃の音が鼓膜に響いた。

「な……っ！？」

ウイルヴェールの視線の先にはドラゴンがいた。

ドラゴンはウイルヴェールに向かって火を吐いた後、すぐに上空に飛んで行ってしまった。

——だが、十分だ。

エウレアの体から一気に体毛が逆立った。

四つん這いの体勢から、獣と化してウイルヴェールに向かった。

気づくのが遅れたウイルヴェールの首元を食い破る。悲鳴さえなく彼は自分の首元を抑え込んだ。

次の瞬間、ウイルヴェールの体が小さなぼろ雑巾のように変わった。

「……人形？」

人型の小さな人形。

——俺が戦っていたのは、偽物の人形だつていうのか……？

「思わぬ邪魔が入ったが……召喚陣はここには無いようだな」

「！」

姿もなくどこからか声が聞こえる。

だが紛れもなくウイルヴェールの声だった。

「また会おう。魔獣エウレア」

「……」

エウレアは大分ぼろぼろになった家を見た後、外に出た。

何も残されていない空を見上げて、彼は遠くへ意識を飛ばしていた。

## 崩壊の余韻 2（後書き）

スライムの謎……（笑）

戦闘の記述が難しいなと思います。

書きながら練習していこうと考えています。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 崩壊の余韻 f i n a l

みつは顔をあげた。

「これからどこに行くの？」

ウィングが周りの様子を丹念に調べながら答える。

「都市ティンダーだ。一応この森の先にあるわけだが警備が厳重で俺も一度くらいしか入ったことがない」

ドゥーラが同意するように頷いた。

「ここはちよつとやそつとのことじゃ崩壊したりはしない。書物にも載っているように歴史ある都市の一つなのだ」

「何故崩壊したりしないの？」

「魔王の配下……魔物による守りの魔法が都市を守っているとも、元々が魔法によって作られた都市とも聞く。詳細は我らにも分からないのだが」

みつの問いにドゥーラが深く思索しながら答えた。

落ちかかったいくつかの枝が、長身のクールヴェリアたちの視界に立ちはだかる。足元に絡みつく枝や草をゆっくりどけながら、クールヴェリアは姫を促した。

姫はクールヴェリアの手を取りながらおぼつかない足取りで歩く。途中よろめいた腕が枝にぶつかりそうになると、水筒からにゆるりとスライム（ぴょんちゃん？）がクッションになった。

「……」

水筒の先をみつの熱い視線がみつめる。

ほんの少し嫌な予感がして、なつはみつに声をかけた。

「みつ、行こう」

「……うん」

何故か熱い視線は水筒を離さない。

半ば無理矢理みつを引っ張って先に向かう。

「出たぞ！」

なつは目を見開いた。

別に熱い視線を注いでいたみつも、目を奪われた。

どこか色の褪せた、歴史を感じさせる都市——ぐるとレンガで囲まれた円形の都市は、二人の目には断片しかみえない。どれだけ大きい判断が付かないが、サウレンアやツールよりも大きいのは確かだった。

「ここが、ティンダー？」

「ああ。ティンダーには城がない。王族がないからな。ただし……ああ、やっぱり警備兵がいる」

警備兵がティンダーの門に二人立っている。

顔が兜に沈んでいてみえない。

そうかと思えば、二人の顔はにゅっと伸びて、まん丸の目と緑色の肌が覗いた。

「と、とかげ!？」

なつは思わず声をあげた。

「巨大とかげ!？」

驚きながらみつも声をあげた。

ウイングが不思議そうに目を丸くした。

「なんだ？ とかげって。あれは魔物だよ。警備の魔物兵だ」

なつはもう一度目を凝らして目の前の魔物をみやる。

兜をかぶっているが、お肌つるつるで、この調子なら頭もつるつるだろう。

みつはごくりと喉を鳴らした。

密かに触ってみたいと思っているのは、みつには喋らないことにした。隣で喉を鳴らしている様子をみれば、暴走するのは必至だ。

トカゲ兵——いや、魔物兵はこちらをみやった。顔形からあまり緊張感は感じられない。

「何か用か？」

魔物兵の綺麗な言葉のイントネーションに、みつが興奮してなつに小声で話しかける。

「喋った！ とかげが喋った！」

……小声だが感情は激しかった。

「しーっ！ 落ちついて」

そんな様子を知ってか知らずか、ウィングが魔物兵に慎重に話しかける。

「隣国サウレンアの者だ。奇襲をうけてこちらに亡命してきた」

「許可の無い者は通すわけにはいかない」

動じない様子で魔物は答えた。

「許可って……緊急事態でもだめなのか？」

クールヴェリアが戸惑いながら話す。

「お願いします」

「だめだ」

姫の言葉も一刀両断、一切聞き入れる耳は無かった。

……ん？ どこに耳があるんだろう？

なつは不思議に思っただけに似た魔物をじっとみやる。

「……？」

魔物と目が合った。

なつの顔をみやる魔物の視線が、滑るように全身に移る。

「それは……」

魔物はもう片方の魔物と何かをこそこそ喋った。

それからもう一度こちらをみやる。

「許可しよう。ただし、もめ事を起こしたりしないでくれ」

先ほどの押し問答が嘘のように、二人は道を開けた。

六人は不思議そうに顔を見合わせた。

「どうなってるんだ？」

「よく分からないが……まあ、いいか」

開かれた門の中を通りながら、なつはもう一度魔物兵を振り返った。

まん丸の目がじっとこちらをみつめていた。

門を通って内部に入ると、様々な人で混んでいる。

「なんじゃこりゃ……」

みつが小さく呻いた。

巨大なかたつむりに足が生えたような生き物が目の前を横切っていく。

そうかと思えばキリンがモノクロになったような生き物が地面に座っている。

「これも、魔物？」

クールヴェリアは表情を変えことなく答える。

「ああ。魔物の中でも低級の……ペットみたいなものだと思う」

なつは辺りを見渡した。

塔の外装の一つが光に照らされて金色に光る。周囲の建物の外装にも光が漏れて、セピア色に輝いていた。

「すごいね……外からは全然みえないのに」

なつは感嘆の声を漏らした。

「強力な魔法によって庇護されているのだな。長いこと生きてきたが目に出たのは初めてだ……」

ドゥーラは周囲をぐるりと見渡しながらつぶやいた。

「……」

姫は黙っていた。

クールヴェリアが姫の表情に気づく。

「……宿をとろう。みんな今日は疲れたはずだ」

彼の言葉に全員が頷く。

「そうしよう」

みんな疲れきっていた――

月の光がしとやかに窓ガラスに溢れる。

この世界にも月はあるのだとみつは気づいた。

月に彩られた女性が一人――白いドレスを纏ったアーレイシア姫

が立っていた。

「……」

姫の肩が震えていた。

「……お姫様？」

みつの言葉に、姫の体がびくつと揺れた。

彼女は恐る恐る振り返る。

頬が涙で濡れていた。

「……勇者様？」

「みつでいいよ。……泣いていたの？」

姫は泣いた顔を隠すように顔を背けた。

みつは静かに姫の隣に立つ。

「……私……」

彼女は小さくつぶやいた。

「こんなことになるなんて……思わなかった。……クーと一緒にいたくて、城を抜けたけど……お母様とお父様を失うことがこんなに恐いなんて……思わなかった」

姫は目を伏せた。

月の光は彼女の気持ちを知ってか知らずか、ただ照らし続けていた。

みつは空を仰いだ。

この世界の月は……きつと私たちの世界の月より大きい。全てを照らしだすのではないかというほどに。

——でもきつと、心の底まで照らすことは出来ない。

「私子供だったんだ……」

月でさえ照らせないほの暗い闇が、姫の心に纏わりつく。

みつは静かに言葉を聞いた。

「罰があたったのかな。勝手なことをしたから、自分勝手だったから……こうなっちゃったのかな」

みつは首を横に振った。

「そうじゃないんじゃないかな。好きな人と一緒にいたいって思う

のは……普通だと思う。お姫様はただ……少し立場が違っただけで」  
「……立場？」

「うん。でもこれは仕方がないんだよね。みんな思い通りにはいかない。でも、こうしたらよかつたんじゃないかって後悔はする」

——後悔。

後悔しなかったことなんて無い。

「自分をもっと強かったら、もっと大人だったら……もっと守れるものがあつたんじゃないか、とか。色々」

「強かったら？ 勇者様もそう思うの？」

「……うん」

姫はみつの横顔をみつめた。

自分の涙が止まったのにも気づかずに、みつめた。

「トールの王子様が殺されているのをみて、すごく恐かった。王様と王妃様が残る時も何も出来なかった。違う世界だからって……どこかで楽観的に考えてたんだ」

みつは姫にまっすぐ向き直った。

頭を下げる。

「ごめんなさい」

「ゆ、勇者様？」

「勇者なんかじゃない。私は何も出来なかった……」

姫はそつとみつの肩に触れた。

「勇者様……ううん、みつ。私はお母様から、あなたが私とクーのために尽力してくれたことを聞いたわ。それを聞いた時、とても嬉しかった」

みつは顔をあげた。

そこには姫の優しい顔があつた。

「私たちのしたことが例え自然なことだとしても……一国を背負う者として許されることじゃない。それでも私たちの気持ちを考えて、行動までしてくれた。本当に嬉しかったの」

「お姫様……」

「あなたに会えてよかった。だから、自分を責めないで」  
宵の闇が色濃くなるのに比例して、月の光も濃くなっていく。  
綺麗なだけではない艶のある輝きに変わっていく。

「……」  
時間は過ぎる――

なつは目を開けた。

冷たい霧が立ち込める中を、体が割って入るように進んでいく。

――ここは、どこ？

ティンダーの宿のベッドで眠ったはずだったのに。

薄暗い闇の中で、白い霧だけがやけにおぼろに光っている。

――どこなの？

急に体がふわりと浮いた。

霧もゆつくりと晴れて、薄暗い闇に光が差しした。

柔らかい光――月？ この世界にも、月があるんだ。

光に照らされて、辺りの景色がはつきりとしてくる。月光とは異なる赤い光がくすぶっていた。

「……？」

赤い光は焚き火だった。焚き火のすぐ側には体を丸めた生き物がいる。

以前みたドラゴンだ。

「お前は……」

低い声が聞こえた。

振り返ると端正な顔立ちの男が立っている。

――あの時の……？

彼はこちらをじつとみやった。

「精神体になって来たのか……」

なつは首を傾げた。

「精神体？」

「心を意識と共に飛ばした時の体のことだ。魔法で意図的に行う者もいれば、無意識の内に不安定に行う者もいる。お前は後者だな」

彼は焚き火の側に座った。

「来るといい」

なつは恐る恐る彼の隣に近寄った。

「……あの……」

彼はなつの体に腕を伸ばした。体が透けて腕は貫通していく。

「心は、奪われていないな？」

「え……？」

「絶対に奪われるな」

力強い瞳が透き通った体を射抜く。

なつは言葉を呑みこんだ。

「……」

焚き火の音がぱちぱちと聞こえてくる。

なつはドラゴンの鱗に光が滑るのをみつめた。

ドラゴンは微かな寝息を立てていた。

「あなたは……一体誰？」

静けさに水を打つのを躊躇いながら、なつは喋った。

彼はこちらを向いた。

「……名前のこと？」

「え？ え、えーと……うん」

「名前……。……レイル」

少し小さな声で彼はつぶやいた。

——本当はもっと聞きたいことがあるはずなんだけど……

聞くのが躊躇われるような気がする。

それでもなつは、恐る恐る訊ねた。

「あの……レイル……？」

彼——レイルは黙ってこちらを向いた。

「どうして……私たちの名前を知っていたの？」

レイルは少し遅れて答える。

「視てきたから。それが理由だ」

答えはとても簡潔だった。簡潔すぎてその意味を知るのは難しかった。

レイルはなつの心情を読みとったのか、「いずれ分かる」とだけ答えた。

「……もう戻れ。落ちついただろう？」

なつは驚いてレイルの顔を見上げた。

——知っていたの？

レイルの目をみつめた。黒い瞳からは流れる波のように、捉えどころの無い雰囲気を感じる。それでもしつかりと力強さが残っていて、不思議な感じもした。

「寄り道せずにまっすぐ帰ることだ。自分が今いる場所を感じるのと……もし万が一、途中で出来なくなったら、それが導くだろう」

レイルはなつのポケットを指差した。ポケットから出てきたのは石ころ——あのお守りだった。

「これ……ツールでも助けてくれた」

「それは魔法石だ。といっても魔法石の一部でしかない。ベテランの魔導師なら物足りないような代物だが……今のお前にはあっても良いものだろう」

なつは魔法石を色々な角度から見渡した。

「ウイルヴェールに会った時も、これが助けてくれたの」

レイルはほんの少し形の良い眉をひそめた。

「……ウイルヴェール……」

彼はぽつりとつぶやいた。その声色がどのような感情を秘めているのか、なつには全く分からなかった。

「さあ、もう戻るんだ」

レイルの一言で、なつの体が浮遊感に包まれた。

揺らめいていく。目の前の視界も、レイルの姿も。

「……なつ。今回のこととお前が考えていること、考えたこと……それは本当は考えるべきことであって、同時に考えてはいけな

と。全ては両刃の刃……覚えておくんだ」

レイルの言葉の意味――

それが分からないまま、なつは眠りにつく。

## 崩壊の余韻 f i n a l (後書き)

今回は話場面がメインになってます。

いつも以上に書くのには試行錯誤した章でしたが、改めて文章を書くのは難しいなと思います。

あれ？ 方向性は……みえてるのか？

や、きっと大丈夫です（汗）

次回もネット環境の悪い場所だったり、忙しくなりますが、遅れつつも更新しようと思います。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 魔物ペット計画1

朝の光が差し込んで、なつは目を覚ました。

ちょうど同じタイミングで部屋のドアがこんこんとノックされた。顔をあげてドアを開けると元気な声が聞こえた。

「おはよー、なつ！ ご飯だよ、目玉焼きもあるよ」

「みつ……相変わらず朝強いね」

みつはとても朝が強い。それは、剣の練習をするために朝早く起きる習慣がついたことが大きな理由といえた。朝に弱いなつにとっては羨ましい限りだった。

「今……行く……」

小さな声でみつに答えて、なつは自分の寢癖に水をつけた。それからふらふらとゾンビのように覇気なくみつの後について行く。

姫、クールヴェリア、ドゥーラ、ウィングがテーブルの前についている。

「おう、朝食出てるぞ」

なつはみつの隣に座った。全員がみつの「いただきます」の掛け声で朝食を食べる。

みつがふと世間話のついでのように言葉を喋った。

「私、ウィルヴェールを倒す」

ウィングが喉に食べ物を詰まらせながら、「うつ……！」と声をあげた。クールヴェリアや姫、ドゥーラが呆氣にとられたようにみつをみやる。勿論なつもだ。

「み、みつ……？」

「一晩中ずっと考えていたの。私はウィルヴェールのしたことを許せない。だから、強くなる」

みつはウィングをまっすぐみつめた。

「だから、朝食が終わったら稽古をつけてください。ウィング」

「……」

ウイングは喉を押さえながら、戸惑ったようにみつをみやる。  
だが、その表情は真剣なものに変わった。

「……中途半端な覚悟じゃないだろうな」

「うん。もちろん」

みつは力強く頷いた。

「分かった。俺もサウレンアの仇を討ちたいからな」

姫の顔がほんの少し暗くなった気がした。

「みつ……本気？」

みつはなつに顔をあげた。

「うん、決めたんだ。心配しないで。なつのことは私が守るからね  
！」

クールヴェリアとドウーラは小さく頷いた。

「俺も手助けしよう。サウレンアは俺にとっても故郷だからな」

「クー……」

クールヴェリアは姫の頭をぽんぽんと叩いて、優しく微笑んだ。

「だが……ウイルヴェールは相当強い力の持ち主じゃ。対策を練らねばならんな」

「そうだな。うーん……」

ウイングは腕を組んだ。眉間に皺をあてて考え込んだ。

「……」

なつは視線を外した。

「……！？」

その先で、姫の連れているぴょんちゃんが、にゆるにゆると水の  
入ったグラスで泳いでいるのがみえた。

みつはなつの視線の先に気づいて、声をあげた。

「あら……ぴょんちゃん。お水が欲しかったのね」

姫は穏やかに喋った。

なつはかたかたと体を震わせた。

みつは恐る恐る、泳いでいるぴょんちゃんをみつめた。ふと頭の中  
に衝撃的な計画が浮かんだ。

「……魔物……ペットに出来ないかな……？」

みつの言葉に、全員が固まった。

「な、なに、言いだすの……？」

なつはみつの視線の先をもう一度みやる。

——これを？ いや、これは怪物……厳密に言えば魔物とは種類が違う。じゃあ、なに？ あのトカゲとか？

「む、無理でしょう？」

なつの予想を裏切るように、ウイングはつぶいた。

「……いや、それ、意外といいかもしれない」

「えええ！？」

ウイングはこちらをみつめた。意外にもその目が真剣だ。

「さっきの魔物兵も含めてだけどき、魔物ってかなり戦力として強いんだよな。味方に出来れば最高じゃないか？」

なつは固まった。それでもなんとか声を出す。

「ど……うやって？ 大体そんな魔物を味方にできるような奇特な人なんて……！」

言っではっとしてなつは姫をみやった。

姫は不思議そうに首を傾げた。

「どうしたんですか？ 魔女様」

「……」

——トカゲらしき魔物以上に得体の知れないものをペットにしている人がいたじゃないか。

意味に気づいていないのはお姫様だけだった。

「まあ、それも案として考えておけばいい話じゃな」

ドゥーラは息を吐いた。

「だね！ よし、頑張るぞ！」

異常なハイテンションに陥った彼女の腕を、なつは軽く小突いた。

「……単にペットが欲しいだけ……じゃないよねえ？ みつ」

みつはぎくりとした様子でこちらを振り向いた。そして、彼女特有の反則技『美少女スマイル』を浮かべた。

なつはため息をついた。

——これから色々ありそうだなあ……

\*\*\*

「じゃあ、行ってくるよ。お母さん」

緑色のつるつるした頭にまん丸の目——門前にいた魔物兵よりも小さく、130?ほどの小柄な魔物が後方に手を振った。

「気をつけてなー、ルルル」

魔物——ルルルは大きく手を振った。

気をつけて、といってもすぐ近くの店に買い物に行くだけだった。それでも辺りは多くの魔物でこった返している。稀ではあるが、小さなトラブルでもめあいになって命を落とすこともあった。

ルルルは慎重に歩いた。

大きな人混みを抜けてから、途中、門番をしている兵士に視線をやった。

「すごいなあ……」

門番は憧れの的だった。門を任せられるのは力の象徴でもあるのだ。

——大きくなったらあんな風になりたい……

想像を膨らませていると、ルルルの体に何かがぶつかった。

「わあ、すみません!」

確認する前に咄嗟に謝ってから、ルルルは顔をあげた。

黒い髪の女性がこちらをみている。

——人間?

「あ、ごめんね……」

彼女は一拍遅れてルルルに謝った。そして視線はじっとルルルに向けられている。

「あの……?」

彼女は慌てたように体を反応させた。

「門番の人……人? に、よく似てるなと思って……」

彼女の言葉にルルルは小さく頷いた。それはルルルにとって誇ら

しいことだった。

「うん。同じ種族だから、似てるよ！ お姉さんは人間でしょ？」

「え？ う、うん」

戸惑うように言った彼女の後方から呼び声がした。彼女は「あ、はい！」と答えてこちらに会釈して去っていった。

「……人間とお喋りするなんて初めてだ。後でお母さんに自慢しちゃおう」

ルルルはしばらく彼女が去った先をみつめていた。

なつはドゥーラの横を並んで歩いた。歩幅のせいか少し遅れる形になってしまう。

「さっきのも、門番の魔物兵と同じ種族なんですね……」

ドゥーラは前に向けた視線を変えることなく答える。

「あれは確かりザードという種族だと聞いた記憶がある。魔物の中では力が強い種族と聞いている」

「リザード……トカゲじゃなかったんだ」

こっそりつぶやいて、なつはもう一度だけ後方を振り返った。

「さっきのはおそらく子供じゃな。ふむ……よし、こちら辺で練習するかの」

「え？ え、あ、はい」

——トカゲ……いや、リザードの子供にあったことですっかり忘れていたが、自分は今魔法の練習をしに来ていたんだ。

「気、感情、内部のエネルギーを力として外に出す。本当は体内の宇宙系といった理論も学んだほうが良いのじゃが……そんな余裕はあるまい。実践で行くでしょう」

「は、はあ……」

ドゥーラは手本として真下の草木に向かって蒼い稲妻を走らせた。  
「結構簡単な魔法じゃな」

——簡単！？

なつは驚愕した。

手本を真似するように手のひらを草木に向ける。

ドゥーラの言葉通りにすること、約三十回……全く魔法は発動しなかった。

「ふうむ。……実は黙っていたんじゃが……」

ドゥーラはためらうように声を出した。

「なつ殿には……魔力が無いのでは？」

なつは固まった。耳が遠くなったような気がした。

「……はい？」

「なつ殿には、魔力があるように感じられないのだよ。異世界から来たから、そういうものなのだろうかと思っていたのだが、どうも……」

——待て、待て……

魔力が無いイコール魔法が使えないイコールここにいることは無意味イコール……

私、なに？

## 魔物ペット計画1（後書き）

シリアスからちよっぴりコメディ色が戻ってきた章です。  
そして設定が無いため、妙に書きにくい章でもあります。

突発的に書く内容になりますが、生温かく見守ってほしいと思います。

どうでもいいことですが、リザードの頭を撫でてみたいとか思っている自分がいます。願望の表れでしょうか。  
それではまた。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 魔物ペット計画2

「……でも、でも私レ……精神体になったり……」

「稀に魔力の無い者でも精神体になれるものがある。なつ殿の場合は体質によるものだけなのか判断はつかんが……」

ドゥーラは考え込むような仕草をした。その様子がどこか事態の深刻さを感じさせた。

「……魔法が使えないってことは……この先大変なんじゃ……」

「それが問題じゃな。どうしたものか……」

ウィルヴェールに一度接触してしまった自分だから、漠然とではあるが事の重大さが分かる。

——これは……ものすごくまずい気がする。

みつのように運動神経が良いわけじゃない。少なくとも自分は剣を持って戦えるような体質じゃない。

「私……どうしたらいいんでしょう」

ドゥーラはゆっくりとこちらに視線を向けた。

「ふむ……まずは魔力石や様々な魔法の品を集めて防衛できるようにした方が良いでしょう。他の地によっては魔法の使えないものでも魔法と同じ効果を得られるように研究をしている所もある。それに、まだ完全に魔法を使えないかもわからぬ」

「……」

「魔法の使用はさきほどのやり方が基本になる。しばらく練習すれば使えるかもしれぬ。あまり気を落とさぬように」

「はあ……」

それでもわずかのショックは隠せない。

なんとなく意気消沈しながらなつはつぶやいた。

「しばらく一人で練習してみます……」

ドゥーラは小さく頷いて「宿の方にいる」と喋った。気遣ってくれたようだった。

「……本当にへたれかも」

——みつはああ言ったけど……正直私は怖い。  
ウィルヴェールに対峙した時の恐怖。まだほんの少し手が震える。  
魔法が使えないならなおさら……戦いたくない。それが正直な気  
持ちだ。

なつはため息をついて、人混みの中に戻った。

ほんの少し気晴らしに街の中をみてみようと思ったからだが、何  
故だか店の近くは人混み（ほとんどが魔物たちなのかもしれないが）  
でこった返している。

「あ、ごめんなさい……」

なつの体に微かな衝撃が襲った。

「いつてえ……」

低く唸るような声が耳に入る。すぐ側にいたのは浅黒い肌の人間

——いや、みためは人間のようだった。

「痛いなあ、お譲さん。どこみて歩いてんの？」

彼——見た目が人間の男性のような声の主は、目を細めた。

「すみません……」

なんとなく嫌な予感がして、なつはもう一度謝った。

「……お譲さん、人間だな？」

「え……」

彼は意地悪そうに口の端を吊り上げた。

予感確信に変わりかけていた。

逃げようと背を向けたなつの腕が思いきり引かれた。

「おやすみ？」

「！」

小さな光が視界に入る。

途端に強い睡魔に襲われて、なつは瞳を閉じた。

「今日はツイてるな……」

意識が無くなる前に、声が聞こえた——

「あつ……！」

ルルルは声をあげた。

——しまった。薬草を一種類買い忘れた……

「なんてこつたい！ 母さんに叱られる！ 今日の特売日だから、  
買って帰らなきゃ……」

ルルルは来た道に戻って、足早に店に向かった。  
運の悪いことに店は結構遠い。しかも混んでる。

「……あれ？」

ルルルは緑色のつるつる頭をほんの少し傾けた。  
視力の良い瞳に、きらきらとした表情が映った。だいぶ遠くではあ  
るがよく見える。

綺麗な笑顔に熱い視線——どこか好奇心さえ感じられる熱い眼差  
し。その視線は明らかに自分に向けられている。

——雰囲気が人間……にみえるけど……

その視線の主——女性はしっかりと足取りでこちらに向かっ  
てきた。

「トカゲだあつ！」

妙な奇声にルルルは身を引いた。

——びっくりした……っていうか、こつち来る！

ルルルは恐怖を感じて彼女に背を向けた。よく聞こえる耳に（人  
間ほど外見的好くみえる耳ではないが）彼女の早い足取りが聞こ  
えてくる。

——お、追いかけてくる！？

しかも早い。

「待てえ！ トカゲ！」

——と、とかげ！？ 『とかげ』って何？ っていうか僕のこと  
！？

明らかに自分を追いかけてくる足音に、すっかり恐れをなしたル  
ルルは買い物も忘れてひたすら走った。

しかも驚きのあまり道まで忘れて走ったせいか、行き止まりになっ  
てしまった。

「ひ、ひいいい……！」

ルルルは恐怖に震えた。

彼女はじりじりと近寄ってくる。しかもよくみると背中に剣を納  
めている。

——僕……食われるのかもしれない……お母さん、お父さん……！  
目の前までやってきて、ルルルは固く目をつぶった。  
ほどなくして、頭に何かの感触がアたる。

「……？」

不思議に思っテルルルは片目を開けた。

頭に彼女の手が触れている。手は自分の頭を撫でていた。

「撫でてみたくて仕方がなかったんだよね。つるつる。気持ち  
いい」

彼女は嬉しそうに笑みを浮かべた。何が何だか分からないがその  
笑顔はとても綺麗だ。

「あ、あのう……」

彼女はこちらに気づいたように笑みを深めた。

「はじめまして！ 私みっつて言うんだよ！ 君の名前は？」

「え……ぼ、僕はルルル……」

「ルルル！ よろしくね！」

みっつは半ば強引に僕の手をとって握手をした。

「あの……ど、どうして僕を追いかけたきたの？」

「あのね、友達になりたかったの！ あと、頭を撫でてみたかった  
んだ！」

なんだかよく分からないが……とりあえず僕は食べられたりしな  
いということなのだろうか……

「みっつは人間……だよな？」

「うん！ この町、いろんな魔物がいるよね！ かたつむりとかキ  
リンとか！」

「か、かたつ……？ きりん？」

みつはきよきよと辺りを見渡した。

「でもあまり人間はいないよね」

ルルルは小さく頷いた。

「それはそうだよ……ここに人間が来ることは滅多にないからね。門番に認めてもらえなきゃ、無理なんだ」

「そうみたいだね。どうして入ってこれたか分からないけど……」

ルルルは不思議そうに首を傾げた。

「みつは……どこから来たの？」

「サウレンアだよ。サウレンアは……崩壊しちゃったから」

「サウレンアって隣国でしょ？ どうして崩壊したの？」

みつはほんの少しだけ黙った。

「……ウイルヴェールに、消されたんだ」

ルルルは目を見開いた。

——ウイルヴェール……まさかそんな近くに……

「だからね……私たち、ウイルヴェールを倒そうと思ってるの。そのためにも、仲間になってくれる魔物を探してるの」

みつは先ほどとはうって変わったように真剣な眼差しを向けた。

ルルルは戸惑った。

「みつ……その言葉はここでは言わない方がいいよ。僕らは反ウイルヴェール派だけど、中には……本当に稀だけど、中にはウイルヴェールの仲間もいることがあるんだ」

「そう……なの？」

ルルルは辺りを見回しながら頷いた。幸いこの付近には誰もいなかった。

「そっか。なんだかよく分からないけど、魔物も大変なんだ……」

「感心しているみつをみていたルルルは、思い出したように飛び上がった。」

「あ、みつ、悪いけど……僕おつかいの途中なんだ」

「おつかい？　じゃあ手伝うよ！」

ルルルは目を丸くした。

「みつが？」

みつは瞳をきらきらさせて頷く。

——人間って、意外とやさしいのかなあ。

ルルルは今までとは違った目で彼女をみつめた。

「よし、行こう！　ルルル」

「あ、待ってよ！」

道知らないはずのみつは、率先してルルルの手を取ったのだ  
た——

## 魔物ペット計画2（後書き）

みつはあまり人見知りのない性格のようです。

今日も暴走しています。

魔物と人間の性別や環境その他は一体どうなっているのか……  
想像力を働かせて書いていきたいと思っています。

読んでくださった方々に感謝をこめて――

### 魔物ペット計画3

——熱い……

ぐしゃつとする。どろどろする。

汗をかいてるような気がする。それに頭が重い。

目に見えない鎖に押さえつけられてるような感覚に、体が動かない。瞼を開けるのを阻止している。

『起きろ』

全ての重圧さえ遮るようにしっかりとした声が頭に響く。

『起きろ！』

先ほど以上に強い声にびっくりと体を震わせると、同時にそれに呼応したように瞼が反応する。

なつは目を開いた。

「……！？」

目に入ったのは浅黒い肌の男。

野性的な外見は至近距離でみると意外と端正な顔の作りをしている。

一拍遅れて自分がそれほど彼の近くにいることに気づいて凍りつく。

「もう魔法が切れたのか？ 起きるのが早すぎるだろう……」

その言葉になつの思考がフル回転する。

——そうだ……私、こいつに捕まったんだ！

体を動かすのがしゃりと鎖の音が聞こえた。逃げられない。

「無理だよ。その鎖は魔法で強化してある。魔力の無い人間ならなおさら逃げられない」

「！」

魔力が無い人間——魔力が、ない……人間。

「ど、どうする気？」

男は意地悪い笑みを浮かべた。

「食つのさ」

言葉と同時に彼の口から牙が生えた。

牙を覗かせながら男は笑みを深める。その間にも今度は頭に耳が生えていく。

人間とは違う、獣の耳――

「……」

呆気にとられてなつは男の姿をみつめた。

「俺はウルフリザード。人間を食べるのが楽しみでねえ」

「ウルフ……リザード？」

「そうだ……門番にいたリザードの別種、と言ったら分かりやすいか？ まあ、知ったところでお前には為す術もないがね」

ウルフリザードは鋭い爪のはえた手をなつに向けた。

なつは体を動かした。がしゃがしゃと鎖は音を立てて腕に刺激を与えるだけだった。

「……っ！？」

ぎりつと激しい痛みが左腕に突き刺さる。

うつすらと赤い線を浮かべた皮膚が、裂けた服の隙間から覗いた。

「あんまり動くと、ますます痛くなるぜ？」

彼はにやりと笑みを深める。

「煮物は好きか？ しっかりだしをとった人間の煮込みは最高だぜ？」

男の後ろにはぐつぐつつ煮たった鍋が置いてある。

「き……嫌い！」

――冗談じゃないっ！

そんな死にかた、絶対嫌だ！

想いを無視するように彼は腕を振り上げた。なつは目をきつくつぶった。

――誰か助けて！

「なに……っ！？」

まばゆい光が瞼の裏に映り、なつは目を開けた。

レイルがくれた魔法石が光っている。

ウルフリザードはなつから距離をとって目を細めた。

「魔力……？ 魔法石か？」

光はなつの腕の鎖にも浸透していった。鎖はまるで砂屑のようにぼろりと溶けて消えていく。

驚きながらもなつは逃げようと窓に手をかけた。

「逃がすか！」

「！」

男の叫びに呼応して鋭い風が唸りをあげてなつの体を襲った。

弱まった光が体の中心を守り、風は拡散して両腕の袖を切り裂く。小さなかすり傷がついた。

「そんな魔法石を持つているなら手加減はいらないな……」

なつは恐ろしくなつてよろめいた。左腕を押さえながら座りこむ。

—— 恐い……

ゆっくりと男は近づく。後ずさるようになつは床を手探りした。

—— もうだめ……

「待てー！」

「！？」

大きな叫び声と共に誰かが木製のドアをぶち破った。

呆氣にとられながらその姿をみやると剣を構えたみつが立っている。

いや、一人じゃない。隣には緑色の頭——リザードが立っていた。

「なつから離れなさい！ 変態獣男！」

みつは剣先で鋭くウルフリザードを指差した。

男は眉をひそめた。

「聞こえないの？ そんなに立派な耳があるのに！ なつから離れてって言うてるの！」

男はなつをみやった。

「…… なつってお前のこと？」

「え？ あ、はあ……」

それから彼はもう一度みつとりザードに目を戻す。

「お前も人間か。餌が増えるとは今日はかなりツイてるな。わざわざ俺に食われに来てくれるなんて」

「食われに来たとは言つてない！ いいから離れて！ なつに危害を加える奴は私が絶対許さない！」

「いいぜ、その闘志。力づくも悪くない」

みつは剣を構える。

ウルフリザードはにやりと笑みを浮かべる。

「ちびっこリザード……お前も相手になる気か？」

リザードはほんの少し体を震わせた。

「僕は平和を守る武士………それを守るためなら、ウルフリザードとも戦う！」

「いい心がけだ。リザードの肉もまずくはない」

ウルフリザードは目を大きく見開いた。一瞬瞳は真っ赤に光る。

一番初めに動いたのはみつだった。

「はっ………！」

みつは左下方から右上空へ剣を薙いだ。ウルフリザードは鋭い爪でそれを受け止め、余裕の笑みを浮かべてみせる。

「遅い………！」

「！」

剣を受け止めた左爪をそのままに、右爪がみつの懐に向かう。みつは素早く剣を引いてそれを弾いて距離をとった。

男は一気に爪で風を切る。鋭い刃のような風が唸りをあげてみつに向かう。

「くっ………！」

みつはそれを全て剣圧で霧散させた。だがその間に鋭い爪がみつに向かった。

「みつ！」

爪を防いだのは小さなリザードだった。緑の肌につけていたブレスレットが白い剣になって、ウルフリザードの爪を受け止める。

ウルフリザードは再び一気に距離をとった。

一連の動作はかなり素早い。それでも彼は息一つ乱してはいなかった。

リザードは思いきり火を吐いた。

「ふっ……」

ウルフリザードは予想済みと言わんばかりに笑みをこぼす。体に生えた尻尾がリザードの炎を受け止めた。

「次はこっちの番だ」

耳が震えるほどの咆哮が轟いて、受け止められた炎が激しい竜巻のようになって二人を襲った。

「みつ！」

なつの叫びも虚しく二人は炎に巻かれて見えなくなってしまった。

「みつ……みつ！」

「人の心配してる場合か？」

ウルフリザードはなつの顔を覗きこんだ。

そのまま力任せに腕を引っ張り上げられて、なつはよろめいた。よろめいた体を彼は強く押さえる。なつは男を睨みつけた。

「おっと……また魔法石を作動させないでくれよ。まあ、作動させても無駄だけだな」

男はなつに牙を見せつける。そのまま牙を近付けた時、甲高い声が響いた。

「なつに触んな！」

彼はふりあげられた剣を素早く自分の爪で受けとめる。

「同じような攻撃は通じないぜ」

ウルフリザードはほんの少しだけ感心したように眉をあげてみつをみやる。

ほんの少し髪が焦げてはいるが、みつは無事だった。後方で煙を払いながらリザードも体を立て直す。

ウルフリザードは素早く腕を振り上げてみつに飛びかかる。

みつはそれを剣で受け止めながらも、体は後方に押されていた。

彼は余裕の笑みを浮かべて、みつの懷に飛び込んだ。

「！」

「とどめだ」

「やめて！」

なつの言葉を耳に受けながら、みつは剣を強く握りしめた。

お腹がひどく熱くなる。みつは感覚のままに剣を振り下ろした。

「“爆炎ブレード”！」

言葉と同時にみつの体から炎があがり、剣に纏わって爆音を立てた。

「な……っ」

ウルフリザードは後方に吹き飛んだ。

なつは何が起こったのか分からなくなった。

視界にはみつが息を切らしながら立っているのがみえる。

「……今の……なに？」

なつは呆然とつぶやいた。みつはぎこちなく首を傾げた。どうやら本人も分からないらしい。

「魔力が感じられた。みつの魔法だよ」

リザードがそうつぶやいた。

「魔法？ 今のが？ 私が？」

——魔法？ 今のが……魔法。

よくわからないけど、みつが無事だ。

なつはよろよるとみつに足を向けた。だが、それを遮るようになつ腕を何かが掴んだ。

「……！？」

ウルフリザードの腕——なつは凍りついた。

「……ふん、それなりに痛いな」

一気に緊迫が戻った。

ウルフリザードはなつをみやって、小さく笑った。

「今日は疲れた……この辺で終わりにしてやるよ」

ウルフリザードはなつの手を解放した。

そしてそのまま窓の方に近寄る。瞳が一瞬ぎらりと輝いた。

「ちびりザード。お前の名前は？」

「え……？ 僕……は……ルルル」

ほんの少し恐がりながらもルルルは小さくつぶやいた。

「覚えておこう。ルルル、みつ……そしてなつ。俺はジオ。再びお前たちの前に現れるその時まで、覚えておけ」

ウルフリザード——ジオはそのまま目にも止まらぬ速さで窓の外に飛び出した。

「……」

一同はしばらく呆然と黙っていた。

沈黙を破ったのはみつだった。

「……助かった？」

三人はその場に座りこんでしまった。

### 魔物ペット計画3（後書き）

戦闘シーンは研究がいるな〜と思います。

書いていてキャラが動いてくれるとだんだん思い入れが強くなる  
なあなんて思います。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 魔物ペット計画 final

ウイングは顔をあげた。

「今、なんて？」

ドウーラは眉をひそめた。もう一度ウイングに喋る。

「私はしばらくここに残ろうと思う」

「なぜです？」

「先程この辺の図書資料をみせてもらった。そこには城にあった資料の中にも書いていないものがほとんどだった。私はここでそれを研究してみようと思う」

姫はドウーラをみやる。

「それは、なつさんの魔力のことと関係があるのですか？」

「それはまだ分かりません。ですが、何かヒントが得られるような気がするのです。年よりの勘ではありますが」

「分かりました」

ウイングは姫の方を振り返る。

「いいんですか？ そんな、あつさり……」

「良いのです。適材適所、人には人の役割があるもの。それにドウーラの情報はこれから役に立つと思います」

姫の毅然とした態度にウイングは了承したように頷いた。

「分かりました。姫も認めていらっしゃるなら俺が言うことはありません。では、これからどうしますか？」

「それは、みつとなつさんが帰ってきたら……」

「あ」

クールヴェリアが会話を遮るように声をあげた。

「あれを……」

彼の差した方向をみやって、三人も声をあげた。  
みつとなつ、そしてリザードがいた。

「本当にいいの？ ルルル」

みつの言葉にルルルは頷いた。

「母さんのことは、テルが看てくれる。母さんも納得してくれたから」

みつとなつ、ルルルはあれから薬草を買ってルルルの家に行った。ちよつぴり太めのリザード——ルルルのお母さんと、ルルルが話しこんでそれから彼はやってきた。

聞けば、ルルルのお父さんは門番のリザードのように治安を守る兵士らしかつた。

いつか自分も外の世界に出て色々なものをみたい——そんな思いがルルルにはあつた。

ルルルの母は困つたような表情をしながらも、納得してくれたのだ。

「それに、さつきウルフリザードに会つたから……僕はここにいるより、外に出た方がいいと思う」

なつは思案した。

「ウルフ……リザード……」

ルルルは頷く。

「僕がここに残っていたら、もしかしたらお母さんや弟にも危害が及ぶかもしれない。ウルフリザードは凶暴だからね」

みつは「ふうん」と視線を飛ばしてから、ルルルをみやった。

「ルルルが決めたなら歓迎する。来てくれるの、嬉しいし。でも……」

「ごめんね。ウルフリザードと戦うことになったのは私のせいだし」

ルルルは首を横に振つた。

「ううん、みつのせいじゃないよ。それに父さんもあの場にいたら、同じことをしたと思うし」

そう言つて、ルルルは不思議そうに首を傾げた。

「けど、不思議だね……普通ウルフリザードって群れで行動するものなんだけどなあ。あのウルフは一人だったみたいだし」

みつは「げげっ」と声をあげた。

「群れだつたら、勝てなかったよ。私……」

三人が顔をあげると、姫とウィング、クールヴェリアが目の前にいた。

「そ、そのリザードは？」

「仲間だよ！ ルルルっていうんだ。ウルフリザードに襲われたところを一緒に戦ってくれたの。私たちと一緒に同行してくれるって、ルルルは恐る恐る頭を下げた。」

姫とクールヴェリアは顔を見合わせた。

「初めまして、ルルル」

姫はにこにこルルルの手を取った。

「ひ、ひひひ姫！」

ウィングは慌てふためく。

「あら、大丈夫よ。だってみつが仲間だっていつてるんだもの。それよりあなたもほら！」

「は、はあ……どうも、よろしく。俺はウィング。こっちはアーレイシア姫、クールヴェリア。で、ドゥーラが中にいる」

全員が宿の中に入った。言った通りドゥーラは既に椅子に座っていた。

「ここに残るって本当ですか？」

なつの言葉にドゥーラは頷いた。

「うむ。ここは魔力に関する資料も豊富であるし、何かしらの情報が入ってくる。私はここでその情報を集めてお主たちに伝えようと思っている」

「……」

ドゥーラは微笑した。

「心配するでない。ここの情報はこれで通信できる」

ドゥーラはなつに小さな石のペンダントを渡した。

「これは……魔力石？」

「そうだ。これは魔力を通信用のみに限定しているものだ。なつ殿は魔力石の使用には慣れているだろう。だから、これはなつ殿に預

ける」

なつはまじまじとペンダントをみつめた。綺麗な赤い石だ。

「分かりました」

ウィングはそれを見届けた後、つぶやいた。

「しかし……これからどうする？ ウイルヴェールを追うにしても、奴がどこに向かうか分からない」

「それなら、まずはセルポリスに向かつてはどうだ？」

クールヴェリアが言葉を発した。みつとなつは眉をひそめた。

「セルポリス？」

「ああ。結構大きい都市で、色々な情報が飛び交っているんだ。あそこならウイルスの情報が入ってくるかもしれない」

ウィングは思案した。

「それはいい考えだな。あそこならこいつも直してもらえるか」

ウィングは小さな短刀を取り出した。

まるで茎が何重にも巻きついて絡んでいるかのように複雑な細工が施してある。その中で、花の果実のように目を引く蒼い石が埋め込んである。

「それ、なに？」

みつの言葉にウィングは答える。

「これは俺の宝物だな。魔法剣——本当はすごく長いんだけど、今は短くなってるんだ」

「魔法剣？」

ウィングの代わりにルルルが答える。

「魔力を帯びた剣のことだよ。普通の剣とは違って特別な性質があるんだ。例えば切ったら燃えるとかね」

「へえ……なんかすごい」

ウィングは苦笑した。

「じゃあ、とりあえず次の目的地はそのなんとかポリスだね！」

「セルポリスだよ、みつ」

ルルルはやっぱりと訂正した。

\*\*\*

ジオはよろよると林の中を歩いた。

辺りに注意を払うのを忘れずに、木々に体をもたれかける。

「……くそっ」

光が遮られて薄暗い中で、次第に自分の居る場所がどこなのか見失っていく。

——簡単に、飼いならされやがって……

後悔はしていない。けれども、くじけてしまいそうだった。

「……」

やはり、あの時とどめを刺して食っておけばよかったか。馬鹿な俺……

座りこんで木に背をつける。

警戒心を無くしたわけではなかった。

だが、ふと目の前に誰かが立っていた。

「……誰だ？」

その『誰か』は何も答えなかった。

ただ、手に持っていたものを無造作にこちらに投げた。

それをみゃれば、大きな骨付きの肉だった。

「やる」

彼はただ一言喋った。

「……？」

投げ出された肉をまじまじとみやる。毒が無いのは鼻で分かる。

しかし、これは——

彼は身を翻した。

「……っ！？ ま、待て——！」

男は言葉を聞き届けることもなく、大空へと飛び立っていく。

ジオは残された光沢のある食糧をみつめた。

得ることが難しい、魔獣の肉——ジオは思いきりかぶりついた。空をみつめながら——



## 魔物ペット計画final（後書き）

ジオって名前が結構好き。

そして都市や城の名前ってつけるの難しい。

細々と頑張っという。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 泥棒追いかけて三千里 1

なつは難しい顔で地図を眺めた。

「ええと……ここがこれでこれがこれで……だからセルポリスに行くには……」

ルルルが横からひよつこりと覗きこんだ。

「こういつてこう行くんだよ。しばらく森が続いて湖がみえるんだ。ちなみにこっちはルジェっていう町だよ」

「すごいね」

なつは感心したように声をあげた。

「この地図、緑しか書いてないし……変な記号ばかりだし」

「この地図は簡単に記述されているものなんだよ。もっと大型の地図はもっとたくさん記号が記述されているんだ」

「そ、そうなの？」

みるからにまるやらばつやら矢印やらの羅列にしかみえない。

自分のいた世界の地図はかなりみやすいものなんだろうな、となつは思った。

「身支度はしっかりした方がいいね。結構歩くことになりそうだから」

ルルルの言葉に、遠くにいたウィングが同意する。

「だな。とりあえず、食い物の補充完了だ。昼には出よう」

こうして六人はティンダーを後にした。

サウレンアから出た当初の森よりも光が差し込んで明るい。

だが、歩き続けるにつれ、次第に辺りの景色は薄暗くなってくる。六人は黙々と歩き続けた。

ティンダーの警備がこちらにも行き届いているおかげか、あまり怪物は見当たらない。それでもところどころで小さな怪物が牙を向けて襲いかかってくるが、サウレンアの元兵士二人によって見事に

返り討ちにあっていた。

「……すごい」

みつはぼつりとつぶやいた。

ウイングの実力もさることながら、かつて彼の上司であったクールヴェリアの攻撃の重みは、みているだけでも感心する。

「クールヴェリアはサウレンアの剣の大会でも毎回一位だったからな。まあ、他の王国の剣大会みたいにそんなに大きい催しじゃないが、サウレンアじゃお墨付きの実力者だ」

ウイングが喋る。

クールヴェリアは苦笑いした。

「昔の話だ。それに、世界にはまだまだ強い者たちがたくさんいる」  
ウイングは頷いた。

「ああ……もつと多くの強者がいる。それは俺たちの永遠の目標だろうな」

みつは黙って二人の顔をみつめる。

「……なんのために、強くなるの？」

なつはぼつりとつぶやいた。ウイングはなつの顔をみやる。

「理由？ そいつはやっぱり守りたいものを守るように、だな」  
「守りたいもの？」

「ああ。それに俺にとってそれは友人との約束でもあるから」  
ウイングは微笑した。

「友人？」

みつは不思議そうにウイングをみやった。ウイングは懐かしい目で短刀をみやる。

「古い友人……だな」

ウイングはそれ以上は言わなかった。

その時、クールヴェリアの目が光った。

「伏せる！」

クールヴェリアは側にいる姫を自分の方に抱き寄せた。

「きゃあ！」

ウイングは素早くなつとみつを引つ張った。ルルルも素早く体を伏せる。

それまでいた場所に無数の矢が飛んでいく。

「誰だ！」

ウイングの叫びに反応するように、ため息が聞こえた。

「外したか……」

見上げれば金髪の男がこちらに弓を構えて立っている。口元に不敵な笑みを浮かべていた。

「あんた誰！ 危ないじゃない！」

「そりゃ、そうだ。あんたたちを狙ってるんだからな」

ウイングは剣を構えた。そのまま金髪の男に向かって駆ける。

素早く剣を振り下ろすが、男はひらりとそれをかわす。

男の指先が弓に触れると、それは短刀に変化した。そのままつむじ風のようにウイングの側を流れる。

「危ない！ ウイング！」

「！」

みつの叫びにウイングは素早く身を翻した。

入れ替わるようにクールヴェリアが男に向かって飛びかかる。だが男は流れるようにそれをかわして、飛び上がった。

木に自分の短刀を差しこんで、器用に上空に上がっていく。

一本の木の枝に身を置いて、男はにやりと笑って見せた。

「いただき」

男は手に持った別の短刀をちらつかせてみせた。

それは、ウイングの短刀だった。

「な……っ！」

ウイングの顔に焦りの表情が浮かぶ。

「それじゃ」

男は素早く木から飛び上がって駆けだした。

「ま、待て！」

ウイングは男を追って駆けだした。

「ウイング！」

クールヴェリアは表情を歪めた。

「あの馬鹿……っ！」

駆けだしたウイングを追って、みつと一行も走りだした。

\*\*\*

「返せ！ この泥棒！」

ウイングは自分より先を走る金髪に向かって叫んだ。

——速い。

自分も足には自信がある方なのに、向こうはそれ以上に早かった。木々も障害もものともせずに走っていく。

ウイングは足を止めることなく顔を歪めた。よりもよってあれを持って行くとは、最低だ。

「待てっつてんだろ！」

ウイングはもう一度叫んだ。

「……待てと言われて待つ盗賊がいるか！」

今度は返事が返ってきた。

——盗賊？

男は一瞬こちらを振り返った。瞬時に狙いをつけて弓矢を放つ。

ウイングはほとんど反射的に顔を背けた。

——肝が冷える。あの一瞬で狙いをつけるとは……

だが、突然男は足を止めた。

「……っ！？」

ほぼ急ブレーキをかけるように、ウイングは自分の足を止める。

男は振り返って、不敵な笑みを浮かべてみせた。それから手に持っていた短刀を高々と上に向ける。

「返せっ！」

ウイングが短刀に向かって足を踏み出したその時——

地面が円形に紫色の光を発した。

ウィングは目を見張った。

「しまった……」

——罨だ！

光は一気にウィングに向かって集中した。

「ばーか」

男はくつくと笑った。

ウィングは憎らしげに男をみやって、そのまま意識を失った。

## 泥棒追いかけて三千里1（後書き）

タイトル、三千里っていくつだ……？　なんてちょっと考えました。  
盗賊の登場です。

最近自分の物語には一人は金髪キャラが出てきてる気がします。  
最近のんびり更新ではありますが、見守って頂けると幸いです。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 泥棒追いかけて三千里 2

「……まずい」

なつとルルルはクールヴェリアと姫、みつの後を追った。

姫はクールヴェリアに抱えられながら走っているとしても、みつは運動部だから体力がある。ルルルは体質上、まだあまり早く走れない。

——それはいい。でも私は……

「あのね、ルルル……」

ルルルは顔をあげた。

「私、体力の無さには自信があるの。……無理」

「なつ……それは自信を持つところ……なの？」

ルルルは不思議そうにこちらをみつめる。恐らくボケだとは思っていない、純粋な知的好奇心による問いだろう。なんとなく、なつは気が咎めた。

「……見失っちゃった」

ルルルは困ったように辺りを見渡しながらも、なつに喋った。

「大丈夫だよ、きつとみつかる。……多分」

ルルルは懷に持っていた地図を開いた。

「みんながこっちに向かって走っていたのは確かだと思うから……この方向だと、ルジエの方だ」

「ルジエ？」

ルルルは頷いた。

「小さな町だったはずだよ。確か。こっちに向かって行こう。きつとみつかるから」

「うん」

なつはほんの少し反省した。自分より小さい——年齢が分からなから、身長的な意味で——ルルルに心配をかけるとは、なんだか情けない。

なつはルルルの地図と方向感覚を頼りに歩き続けた。本当は走ろうとしたのが、体力の足りないなつは筋肉痛で走れそうになかった。

——もう少し、運動してればよかったかも……

なつは肩をすくめた。

そうして二人が歩き続けて五分ほど経過した時

「偶然」

二人の思考を遮るように低い声が聞こえた。

なつとルルルが振り返ると同時に、声の主は木の枝から飛び上がって、綺麗に着地した。

「先刻ぶり、リザードのちびっこに、なつ」

「げ……」

なつは表情を引き攣らせた。

目の前にいたのはジオだった。

「今回は二人だけか。丁度いいな。今機嫌が良いから、たつぷり相手してやるよ。覚悟しな」

ジオは長い爪をなつの方に向けた。

なつは全速力で走った。

「あ！」

ルルルの叫び声とジオが追いかけてくる音が聞こえた。

——あ！ しまった！ ルルルを置いていつちゃだめ……

なつが走りながら背後を振り向くと、ジオがすぐ側まで迫っていた。どうやらルルルは眼中に無いらしい。

「る、ルルル！ 後で！」

身の危険を感じてか、筋肉痛も気にしてはいられない。運動会でさえこんなに必死には走らなかったのに、なんてことだろう。

「そ、そっちは——！」とルルルが叫ぶ声も今のなつには聞こえなかった。

「逃げたって無駄だ！ 大人しく捕まりな！」

「絶対いや！ 逃げるに決まってんでしょ！」

ジオの言葉になつは必死の叫びをあげた。

「なんで私なの！」

木々が時になつの足元を傷つける。思わず転んでしまいそうになりながらも、なんとか踏みとどまって走り続けた。

突然、視界が開けた。

「え——」

大きくて綺麗な湖を前に、なつは急ブレーキをかけた。

だが、止まり切れずに勢い余って湖の端まで体が動く。そこにジオが思いきりなつにぶつかった。

「な……！」

ジオとなつは思いきりもつれるように湖に落ちていく。

なつは悲鳴をあげた。ジオは表情を引き攣らせたまま音も出さなかった。

冷たい感覚がなつの体を襲う。自分が湖の中に落ちたことを嫌でも認識させられていく。だが、何よりもなつの頭の中には一つのこと浮かんでいた。

——私……！ 泳げない！

同じように落ち込んでいるジオと向き合うように、なつは目を合わせた。ジオは辺りを窺うように視線を泳がせる。

「……！」

なつは思わずジオの腕を引っ張った。ジオは驚いたような表情浮かべてなつをみやる。

——泳げない！ 溺れる！

その時、急激な水の流れが押し寄せた。

なつの腕が水圧でジオから離れていく。

——もう……無理……

なつは意識を失った。

ジオは僅かに眉根をよせて、なつの体を自分に引き寄せた。

体も何もかも重い。

まどろみの中のような、虚ろな場所でなつは目を開けた——開けているような気がした。

「あ、起きた」

光でみえない顔がこちらを覗きこむ。でも朧でそれが現実なのか認識が出来なかった。

「……誰？」

「それ、こっちの台詞。俺の居場所で勝手に寝るなよ。邪魔、あっちいった」

顔のみえない男はしっしとなつに出て行くように手を振る。なつはそれでも動かずに辺りを見渡した。

男はごろりと草むらに横になった。なつはそれをみやってから、立ち上がって歩いた。自分がどこにいるかも分からないのに、導かれるままに歩き続けた。途中まで歩いて、なつは立ち止まった。

「……」

何かに押しとどめられるようになつは止まった。瞳から涙がこぼれ落ちた。

心を押しつぶすような不安と恐怖に駆られて、なつは来た道を戻ろうと走った。

草むらに横になっていた男はなつをみやった。

不思議そうになつをみつめていた——

「ぶっはあ！」

ジオはごほつと咳をして、頭を振った。うっとおしそうに水滴を払った。

「くそ……最悪だ」

ジオは腕で顔の水を拭った。横たわるなつをみやって、表情を歪めた。恐らく水を飲んだのだろう、起きる気配はなさそうだ。

「……仕方ねえなあ」

ジオはなつの腹の辺りをそつと押した。二、三回押すとなつは水

を「ごほつ」と吐き出した。

「うつ……げほつ」

なつは数回咳をして、目を開けた。若干不機嫌そうなジオの表情が目に入る。

「ジ、ジオ……？ わ、私生きてる？」

「こんな辛気臭い天国があつてたまるかつてんだ。湿気の多い獲物は嫌いだからな、感謝しろ」

なつはゆっくりと起き上がった。ジオの視線の先を追うように自分も視線を先に向ける。

「……ここはどこ？」

なつとジオがいた場所は、湖に落ちる前の場所とは異なっていた。なにやら薄暗く、トンネルのような口が大きく開いていた。

「さあな……流されて、やっと着いた先がここだった。あと数分遅ければ俺も危なかったが……」

「洞窟……？」

「だとしたらどこに続いてんのか……ったく、せつかくお前を狩れると思つたらこのザマだ。しばらくはここから出るのが優先だな」

ジオは静かに立ちあがって、なつを見下ろした。

「立てるか？」

「え……うん」

意外なジオの言葉にちよっぴり驚きながら、なつは立ち上がった。「ここから出るまで休戦だ。道はこしき無いから、行くぞ」

「はあ……」

なんだか妙な展開になっているなと思いつながら、なつはジオの後ろを続いた。

洞窟の中は思った以上に広く、道は長いようだった。出口の光こそ見えないが、全く暗闇というわけでもなく、ところどころに光代わりの火が灯っている。

「……ねえ」

沈黙に耐えられずになつは声をかけた。

「なんだ？」

「どうして私を狙うの？」

ジオは視線を洞窟の先に向けたまま答える。

「単に好みの問題だ」

「こ、好み……？」

「人間の中では上質な肉だし。あんたのもう一人の人間は美人だが、お前の方がいい」

なつはなんとなく戸惑った。

「な、なんで？」

ジオは肩をすくめた。

「お前の方が、肌が白い」

——肌って……

他意は無いのだろうが、なんだかこの会話は傍からみたら卑猥な気がする。なつはそれ以上質問するのをやめた。

「俺も聞きたいことがある」

ジオはそう言った。

「お前たちは、普通の人間とは気配が違う気がしてならない。一体何故だ？」

ジオはなつをみやった。

「何故って言われても……答えになってるか分からないけど……こちの世界の人間じゃないから」

ジオは呆氣にとられたように固まった。

「……どういう意味だよ？」

「や、そのままの意味だけど……だ、だから答えになってるか分からないって言ったじゃない」

ジオは黙り込んだ。何かを考えるように眉間に皺を寄せた。

そうこうしている内に通路に三つの入り口が現れた。なつは戸惑った。

「ど、どっち行こう？」

「……向こうから順番に」

ジオはめんどくさそうに一番左の入り口を指差した。なつは黙って従うことにした。

「てことは、召喚魔法が完成したってことか」

ジオは思い出したように言葉を発した。なつは不思議に思っただけをみやる。

「召喚魔法……？」

「ああ。噂には聞いていたけど、完成したとは知らなかった。ということはつまり、お前とあの人間が勇者と魔女ってことか」

通路の天井が心なしか低くなっているような気がした。だんだん光も無くなっている。やがて道は途絶えた。行き止まりのようだ。

「引き返すぞ。で、向こうが魔女か？」

なつは元来た道を引き返ししながら小さな声でつぶやいた。

「いや、向こうが勇者……らしいけど」

「は？」

ジオは思わず立ち止まった。

「俺の認識だと、魔女って言うのは魔法を使うと思ったんだが」

「そ、そう思う……」

「……お前魔力無いだろ」

「そ、そう思う……」

なつはなんとなく視線を反らした。「そう思う」としか言えない自分が情けなく感じる。

——なんで私には魔力が無いんだろう……？

なつとジオは今度は真ん中の道を歩いた。

「あの、さ……やっぱり私には魔力が無いの？」

なつの問いに、ジオはほんの少し呆れた。

「俺に聞くのか？ 少なくとも俺には魔力は感じられないんだが。間違っただけ召喚されたんじゃないのか、お前」

——ま、間違っただけ……

ジオの言葉がなつの心に突き刺さった。

「今度は当たりみたいだな」

なつは目の前をみやった。確かに今度は行き止まりではないようだが、道はさらに深く続いているようだ。

「で、でも！ 私精神体になったことがある！ ウイルヴェールに接近したこともあるんだから」

変なプライドからなつはジオに反論した。

ジオはぴたりと足を止めた。険しい表情でなつを睨んだ。

なつは思わず固まった。

「ウイルスヴェール……だつて？」

ジオは思いきり洞窟の壁を叩きつけた。

「俺の前で二度とそいつの名前を出すな！」

なつは言葉を失った。

ジオは苛立ちを発散させるように足を進めた。

「……何か……知ってるの？」

なつはジオから距離を取りながらつぶやいた。ジオは黙々と歩き続けた。

「……ねえ！」

「うるせえ！」

ジオは怒りに任せてなつの首に掴みかかった。

「っ！」

だが、それを阻むようになつの魔力石が熱を出した。その熱さにジオは思わず腕をひっこめた。

「……」

ジオは自分の腕をみやって苦い顔を浮かべた。しばらく二人とも黙っていた。

「……ごめんなさい。もう聞かない」

なつはつぶやいて、洞窟の先へと足を進めた。ジオはなつの後ろ姿をみやった。

「……仲間が、奴に寝返ったんだ」

ジオはぼつりとつぶやいた。

なつは振り返った。

「ウィルヴェールが世界を荒らすようになってから、俺たちの食糧は格段に減った。本当ならば、俺たちは人間に手を出すことは無かったんだ」

ジオはゆっくりと歩きながら続けた。

「そんな中、ウィルヴェールは俺たちに食糧を与える代わりに自分に寝返るように言ってきた。仲間みんな食糧欲しさに寝返ったわけだ」

ジオは自虐的な笑みを漏らした。

「寝返らなかったのは俺だけ。だからこうして単独行動っていうことだ」

「ジオは……どうして？」

ジオは強い眼差しをなつに向けた。

「元凶に何故つかなければならぬ。俺は例え人間を餌にしようが、食糧に困ろうがそれだけはしない。俺にとって魔王様が一番の君主——それ以外にはあり得ない。どんなに落ちぶれようが、それだけは俺のゆるぎない誇りだ」

なつはジオの眼差しをみつめた。とても真剣な眼差しだった。

なつはほんの少しだけ、自分の心を反省した。誇り——自分のそれは、そこまで大きいのだろうか。

なつは考え込みながら足を前に進めた。しばらくすると二人の前に入口が現れた。また三つだった。

「……」

思わず二人は同時に足を止めた。

## 泥棒追いかけて三千里2（後書き）

ジオとなつがちよっぴり接近です。

この洞窟、本当に会ったらすごく具合が悪くなりそう……  
というわけで今回はこれにて。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

### 泥棒追いかけて三千里3

「この洞窟……自分が今中にいるのでなければぶっ壊してやりたいところだ」

ジオは頭を抱えそうになった。なつは困った顔でジオをみやった。  
「今度も端から？」

「……他に思いつかないしな」

ジオは肩をすくめた。うんざりしながら辺りを見渡してみる。すると何やら小さな呻き声がジオの耳に入ってきた。

「なにか、声が聞こえるな」

「え？」

なつは耳を澄ませた。だが、特に音は聞こえない。

「私には何も……」

そう答えて、なつはジオの耳をみやった。

「ど、どっち……？」

なつは思わずつぶやいた。ジオは不思議そうになつの顔をみやる。なつの視線は斜め上をいつたりきたりしている。どうやら頭に生えている獣の耳と人型の耳をみているようだった。

「お前、案外細かい人間だな。深く考えない方がいいと思うぞ」

「だ、だって……！ 私の取り柄と短所はそれしか……！」

「行くぞ。来ないなら置いて行く」

ジオは自分の耳に入ってきた音を頼りに歩みを進めた。なつは慌ててジオの後ろについた。

「待って！ 行かないとはいってない！」

しばらく足を進めていくと、次第に天井が広くなっていき、気のせいか辺りがほんのりと明るくなっている気がした。

なつは興味津々と辺りを見回す。思えば洞窟なんて初めて入った気がする。

「……？」

——初めて……？

ふと、自分の記憶に何かが波紋を投げかけたように感じられた。その波紋は海辺の奥、水平線で小さなさざ波がたったかのように、震源を捜すことは困難に思われた。

「不思議に思わないか？」

なつが考え込んでいると、不意にジオの声が頭に降ってきた。

「お前は別の世界からここに來たんだろう。別の世界に足を踏み入れて、別の世界の住人と一緒に歩いているわけだ。俺にとっては獲物とな」

なつはジオの言葉の続きを待った。

「俺は不思議に感じるな。齒車が狂ったような、ピースが当てはまらなかったような感じが」

なつはちらりとジオの顔をみやる。それは、自分と戦いの時に対峙したのは別の表情に思われた。

「……意外と繊細なんだ」

ジオはふんつと鼻を鳴らした。

「だから、言ってるんだろう。深く考えない方がいいって。考えすぎる性質だから分かることだろ」

不思議と言えば、敵同士の自分とジオが話しこんでいることが、今一番不思議なことだとなつは思う。冬の寒い空を見上げて、こたつの中で暖まってみかんを食べるくらい、気どころが知れているみたいだ。

——それは、多分……

考え込んでいたなつの足元に小さな痛みが走った。

「いたっ……！」

ジオは不思議そうにこちらを振り返った。

「なんだ？ ……っ！」

ジオは、なつの足元の小さなものを力づくで引き離した。それは白いひとでのような形をしていた。

「な、なにこれ……？」

「吸血怪物……血を吸って成長する化け物だな」

ジオはうつとおしそくに鋭くとがった爪でそれを真っ二つに引き裂いた。

なつは自分の足元をみやった。うつすらと血の線が浮き上がっている。

「全く気づかなかった……」

ジオは真っ二つになった怪物と、なつの足元の傷をみやった。

「ちよつと、貸せ」

「へ？　ぎゃあ!？」

ジオはなつの足を引っ張った。なつは思わず地面に手をついた。

「ちよ、ちよつと!？」

ジオはしばらくなつの足の傷をみやってから、べろりとそれを舐めた。

「……!？」

なつは言葉を失って固まった。

——な、ななななな、な……

「治った」

固まったなつの耳に声が響いた。しばらくりピートされた後に、なつはかるうじて声を出した。

「……はい？」

「だから、治った」

ぎくしゃくと、なつは自分の足元をみやる。みると傷が綺麗に消えている。

「な、舐めた!？」

叫び声をあげた後、なつの顔は茹であがったたこのように真っ赤になった。ジオは何事もなかったかのようにぺろりと舌で自分の口元を舐めた。

「うまかった」

「な!？　じ、常識がない!」

「はあ？　治してやったんだから、感謝しろよ。そっち、みてみな」

ジオの指差した方向をみやって、なつは再び固まった。無数の石ころがたくさん集まって小さな山を作っている。

「あれ、吸血怪物だぜ？ お前の血の匂いで群がってきやがったんだ。向こうに吸われた方がよかったか？」

ジオは意地悪く笑みを浮かべて見せた。なつは思いきり後ずさった。

「は、早く進んで……！」

「はいはい」

ジオは洞窟の奥をみやった。

二人がさらに足を進めていくと、今度はしっかりと明るくなっているのがよく分かった。ジオはぴたりと足を止めた。

「ど、どしたの……？ また吸血怪物？」

なつはびくびくしながら目の前のジオの顔を見上げた。

「……匂う」

ジオの言葉に、なつは思わずくんくんと自分の匂いを嗅いだ。

「お前じゃない。向こうから、香水と線香の匂いがする」

「香水と線香……？」

なんだか組み合わせが最悪じゃないかなとなつは感じた。

「んん、言われてみれば……ちよっぴり。ていうか、洞窟の中で線香って……」

ジオの表情が陰しくなった。

「この胸くそ悪くなる匂い……前にも嗅いだ事がある」

ジオの指先がぱきりと軽く音を立てた。

「あれは確か……ウイルヴェールの側で」

「え……」

なつは目を見開いた。

\*\*\*

みつは背後を振り返った。

「どー」

首が痛くなるのもお構いなしに、みつはもう一度ぐるぐると首を動かした。

「どうしよう！ なつが！ なつが、いない！」

おろおろと慌てるみつに向かって、しっかりとした声が降り注ぐ。

「落ちつけ」

クールヴェリアだ。

「でも、クーさん！ ルルルもないし、私、知らない間に二人を置いてきちゃったってことに……！ 私、もう一度森に」

「二人が一緒なら、こちらの方向がルジェだということも知っているはずですよ」

アーレイシア姫の言葉にクールヴェリアは頷いた。

「下手に捜しに森に入って行き違いになったら二度手間だ。それよりも追ってきたはずのウィングの姿が無いのが気になる」

みつは落ちつかない心境で辺りを見渡した。小さな民家がこじんまりと立ち並ぶ町——ルジェに三人はいた。

「森のどこかに隠れちゃったのかなあ？ やっぱり森に」

「いや、それは無いだろう」

みつの言葉をクールヴェリアが力強く否定した。

「クーはすぐ感知能力に長けているの。だから、追ってきたウィングの気配を辿ったらこっちだったのよ」

姫はみつに向かって喋った。

「こっちって……でも」

視線の先にはどうみても平凡な軒並みしかない。クールヴェリアは落ちついた表情で辺りを見渡した。

「どこかに居るはずだ。私はこれから町の住人に聞き込みをする。姫の護衛を頼む」

「わ、分かった」

みつは小さく頷いた。

みつはそわそわと草むらを行ったり来たりと歩く。アーレイシア姫はその様子をのんびりとみつめた。

「もう、ウィング師匠ってば一人で走って行っちゃたのかなあ」

なつの言葉に姫が顔をあげた。

「仕方無いわ。ウィングにとって、あれは宝物だもの」

みつは不思議そうに振り返った。

「宝物？」

「そう。なんでも親友の形見なんだって。私も深くは知らないけど、自分が騎士を目指そうと思うきっかけだったんだとか」

「形見……」

みつはほんの少し色褪せて倒れ込んでいる草をみつめた。

「どうしても手放せない宝物って、きつとみんな持つてるのよね。」

みつも、ある？」

みつは姫の顔をみつめた。

なんとなく、答えられなかった。

### 泥棒追いかけて三千里<sup>3</sup>（後書き）

あけましておめでとうございます。  
今年もよろしく願います。

ジオとなつのコンビの他に、ようやくみつ達も動き出していきそうな気配です。最近は特に更新がのろろですが、気長に記述していく予定です。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 泥棒追いかけて三千里 4

「あ……」

アーレイシア姫は、みつの後方をみやった。

みつがその視線の先を追うと、ぜえぜえと息を切らしたルルルが立っていた。

「ルルル！」

「はあはあ…… やっと、着いた……」

ルルルは大きな目を手で擦った。

「ルルル、ねえ、なつは？」

みつの言葉にルルルが慌てて顔をあげた。

「そ、そうだよ！ なつがジオに会って、追いかけて…… 僕より先にこっちに向かったはずだったんだけど……」

みつは驚いてルルルの肩を掴んだ。

「ジオって誰！？ それで、なつは！？」

「と、途中ではぐれちゃったんだ！ って、みつ！ 忘れたの！？ ジオってあのウルフリザードだよ！ ほら、なつを襲った……」

みつはルルルが言い終わる前に森の中に飛び出した。

「みつ！ どこに行くの！？」

「なつを助けなきゃ！ 探すよ！」

「で、でも、どこにいるか分かんないでしょ！」

みつはフル稼働していた足を急に止めた。

「でも！ なつが危ない…… どうしたらいいのさ！」

あたふたと落ちつきなく動くみつを、アーレイシアとルルルが宥めた。すると、話を聞いていたのか、戻ってきたクールヴェリアが声をかけた。

「もしかしたら、なつ殿とウィングは一緒にいるのではないか？」

アーレイシアは不思議そうにクールヴェリアをみやる。

「どうということですか？」

「森は限られている。それなのにセルポリスに向かったのでもなく、影も形もない。としたら、考えられる可能性は」

「もしかして、魔法？ どこか……転移魔法があると？」

クールヴェリアが静かに頷く。

「ウイングの情報は得られなかったが、代わりにウイングが追いかけた盗賊の情報は得られた。名前はシアン。ここの住人でもあるようだ」

「それが今、なんの役に立つの？」

みつは訝しんだ。

「シアンはこの町に住居がある。行ってみたんだが、そこには大きな転移魔法陣があった」

みつは頭を抱えた。

「ど、どういう意味？ 私、頭悪くて分かんない……」

クールヴェリアは眉をひそめながら、みつをみやる。ルルルはみづに小声で説明した。

「つまりね、魔法でどこかに移動して消えちゃったってことだよ。

ウイングと盗賊のシアン。そして、もしかしたらなんらかの関わりで、なつやジオもそっちにいるかもしれないってこと」

「……どうして、なつやジオもいるって分かるの？」

「あくまで可能性だよ。でも、魔法陣が森に書いてあったなら、それを二人が踏んで消えた可能性も出てくる。僕も森の中を捜しながら歩いたけど、やっぱりなつはいなかった」

みつはまだ納得がいかない顔をしていたが、大きく頷いた。

「よく分からないけど、とりあえずその魔法陣でなつやウイングに会える……かもってことね。よし、行こう」

三人は頷いた。

\*\*\*

ウイングは小さく唸った。

目を開けると同時に、鼻をさすような強烈な香りが鼻孔をくすぐった。

「約束だ」

聞き覚えのある声が、ウィングの耳に入ってきた。視界が開けると、そこにはあの盗賊がいた。

「……」

盗賊だけではない——金色の髪をツインロールにして結わえた女性が立っていた。香りは彼女からしているようだ。

「これで、蘇らせてくれるんだよね？」

女は紫色のアイシャドウをした瞳を大きく見開いて馬鹿にしたように笑って見せた。

「御苦労さま。けど、材料が足りないねえ……。人を蘇らせるなら、もっと高度なものじゃないと。こんな小さな魔力石よりも高度なね！」

女はそう言って何かをぽいつと投げ捨てた。

ウィングは眉をひそめた。よくみると、それは

「それ……！ 俺のじゃないか！」

盗賊はびくつと身を震わせた。

「お、お前、起きてたのか！？」

「今起きたんだよ！ それ返せ！」

「冗談じゃない！ 返すわけないだろ！」

二人の様子をみやって、女は目を細める。盗賊は困ったように女に声をかけた。

「あと何がいるっていうんだよ！ 言われた通りに王家の巻物だつて持ってきたんだ！ これで最後、最後つて何回も言ってたじゃないか！」

「さあ……言ったかしらね？」

何かなんだか分からないウィングは、二人に抗議の声をあげた。

「何かなんだか知らないが、ここはどこだ！ それに、そいつは俺のだって言ってるだろ！ 返せ！ ……っこの！」

ウイングは体をねじらせてなんとか縄から抜けようとしたが、縄は頑丈でちつとも抜けそうになかった。背中の剣を探そうとしたが、それもしつかりと離されていた。

「黙っている！ これで妹を……生き返らせてくれるって言うただろ！ 約束が違う！」

女はやれやれと肩をすくめてみせた。

「冷静に考えてごらんなさいよ。死んだ人間を生き返らせることなんて、無理に決まってるでしょ？ ゾンビにしてあげることは簡単だけど！ あーっははは！」

女はかん高い笑い声をあげた。盗賊は眉間に皺を寄せた。

「……騙しやがったな！」

「騙される方が馬鹿なのよ！」

獣のように鋭く長い爪を盗賊に向けて、女は呪文を唱える。盗賊の床が不気味に輝いて、彼の体は電撃に包まれた。

「うあっ……！」

そのまま盗賊はばたりと倒れ込んだ。

女は妖しい笑みを浮かべて、ウイングの短刀をとりあげた。

「まあ、小さいとはいえ魔力石には変わりない……。持って帰ったら御褒美がもらえそうね！」

「返せ！ それは俺のものだ！」

女はウイングを一瞥した。鋭い爪の一端で、彼女はウイングの頬に傷をつけた。

「……っ！」

「力の無いくせに威勢だけは良い男って嫌いよ。そこで黙って屍に成り果てればいいのよ」

爪先をウイングに向けて、女は彼を見下ろした。

「目玉をくりぬいてあげようか」

言いようのない恐怖が走って、ウイングは頬を引き攣らせた。

だが、女は一気にウイングから距離をとった。自分のすぐ側を横切って行った何かをみやって、目を細める。

「誰かしら」

女の目の前にはジオが立っていた。

「胸くそ悪くなるような匂いの根源はお前だな、厚化粧ばあ」

女は一瞬言葉を失って、固まった。まるで聞いたことの無い言葉を変換しているようだった。

「ウイング！」

聞き覚えのある声にウイングは視線をやると――なつが立っていた。

「なつ！」

「大丈夫！？」

なつがウイングに駆け寄ろうとするのを見計らったかのように、女の腕から光線が走った。

「避ける！」

間一髪のところではジオに腕を引かれて、なつは後方によるめいた。ジオはいらいらと辺りを見渡した。

「おい、こちら辺に通気口は無いのか？ 鼻が曲がるような匂いだ……。大量の血の匂いまでしやる」

ジオは目の前の女を睨みつけた。

「お前、ウィルヴェールの部下だな？」

女はしばらく不思議そうにジオをみやった。だが何かに気がついたように、馬鹿にしたような笑い声をあげた。

「お前、あの犬っころの仲間か」

ジオはぴくりと眉を寄せた。

「嗅覚と聴力だけしか取り柄の無い犬っころ！ 餌につられてほいと魔王を裏切ったばか犬の同属ね！」

「……てめえ」

ジオは静かに瞳を燃やした。

なつは、そつとウイングの方に忍び寄ろうとした。

「動くんじゃないよ！ 小娘！」

「きゃあっ！」

女の声と共に、稲妻がなつの腕を掠めた。

「今度はその女に飼いなされたのかしら？ お似合いよ、尻尾を巻いて逃げる負け犬さん！」

「……」

ジオはぶるぶると怒りで体を震わせた。

なつは腕を押さえながら、ジオの後ろ姿をみつめた。

——ジオ……

なつは女を睨みつけた。女はなつの視線に気づいたようで、不愉快そうにこちらをみやった。

「あなたは、誰なの……？ ウイルヴェールの部下ってどういうこと？」

「あら、いっちょまえに生意気な口を聞くのね、あなたのご主人様は。みたところただの人間みたいだけど、どこに惹かれてるのかしら」

ジオは鋭い爪を何度か揺らした。

「ただの獲物だが、文句があるか？ 年齢不詳のくそばあより百倍マシだがな。あんたのご主人様も趣味が悪いな」

女の鋭い人睨みとともに、風を切る感覚がジオとなつの横を通り過ぎた。ジオの髪が一筋揺れた。

「あの方の悪口を言う奴は、今ここで殺してあげる」

なつは目を瞠った。

燃えるような光のオーラを纏って、女は地面からほんの少し浮き上がった。

「よく聞いておくことね。私はあの方の四天王の一人——ディエナ」

## 泥棒追いかけて三千里4（後書き）

この章はそろそろ次で終わりにしたい……！  
と考えています。迫力のある戦闘シーン書ける人に  
憧れます。もう、本当に……！

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## 泥棒追いかけて三千里 f i n a l

「四天王……ディエナ？」

ジオは後方に後ずさって視線を素早く辺りに泳がせる。そのままなつの側に顔を寄せた。

「聞け。お前がそいつに行くのは、俺と向こうが動き出した時を狙え」

「！」

「返事は、いらない」

なつは目線をジオに向けなかった。

言葉の代わりのように、なつは唾を呑みこんだ。

ジオは爪を地面の方に立てて、丸めた姿勢からディエナに飛びかかった。ディエナはほんの少し体を揺らして、閃光を放った。飛びかかった姿勢から器用に体を動かして、ジオは縦横無尽に壁に向かって飛ぶ。動きのついた尻尾が真っ赤に燃えて、辺りに火の粉を散らした。

なつは一瞬体を震わせてから、ウイングの背中に駆け寄った。

「待ってて……！ん……！」

なつは力をこめて縄を引っ張った。ウイングはほんの少し痛みに顔を歪めた。それでも縄はびくともしなかった。

「き、きつすぎる……」

「素手では無理だ……。俺は剣無しでは魔法は使えない。なつ、魔法は？」

「う……ごめん、無理……」

なつは辺りを見渡した。その時、側を炎が走った。

「ひゃあ！」

なつは思わず縄を引っ張り上げてウイングに体を押し付けた。ウイングは痛そうにほんの少し目を細めた。

「ご、ごめん、火が……！」

「いや……平気か？」

「うん」と答えようとしたなつの耳に、ジオの声が響いた。

「伏せろ！」

「え……っ！？」

じりつと熱い刺激が、なつの頬に当たった。

思わず頬に手を触れると、糸が垂れたような血が流れ落ちた。

「い、痛い……！？」

「ちょこまかと邪魔な女ねえ」

なつのすぐ後ろで高い声が聞こえて、一気に血の気が引いた。

「その足……斬ってあげましょうか」

ディエナの爪が深々となつの足に突き刺さった。

なつの喉から焼けついた石のような塊が出てきそうになったが、なつはそれをなんとか呑みこんだ。

ジオの腕がディエナに向かって唸りをあげた。だが、ディエナの体を包む光が、陽炎のように彼女をその腕から逃す。

ディエナはなつの髪を引っ張って、後頭部を無理矢理引きあげた。

「いつ……！！」

「……あんたから妙な感じがするのよねえ」

なつは思いきり体を振った。肘がディエナにぶつかって、かたんと短刀が地面に落ちた。ディエナは忌々しそうに首元に爪を向けた。

「態度も何もかも気に食わない。気持ちが悪いわ」

なつは視線を自分の足元に向けた。そつと足先を短刀に向けて、軽く蹴り飛ばす。

「……ウイングっ！」

「！」

ウイングの指先が短刀に触れた。

「おまえっ……！！」

刃物のようなディエナの瞳がなつを捉え、その爪先もなつの首にかかるうとしたその時、悲鳴のような咆哮が耳をつんざいた。

なつを掴んでいたディエナの手が緩み、同時になつの体に強い衝撃が加わった。

ぶれる視界に白っぽい光が輝く。

「ぐあっ……！」

なつを覆うように被さったジオが、ディエナの光線を受けたのだ。

「……ジオっ！？」

なつはジオと共に地面に倒れ込んだ。ディエナはその光景を心の底からおかしそうに見て笑った。

「あーっはっはっは！ 犬っころが人間を庇って倒れるなんて滑稽だわ！」

ディエナは一瞬で表情を切り替えて、一気に間合いを取った。

挑発的な彼女の視線の先には新たな敵——ウイングがいたのだ。

「ウィルヴェールもお前も本当に腐ってるな」

ディエナはふふつと鼻で笑った。

「一人も二人も、同じことよ。クズは特にね」

ウイングは剣でディエナに飛びかかる。ディエナの手に紫色の光が現れて、それが剣を受け止めた。

なつはぐったりとしているジオに声をかけた。

「ジオ……ジオ！ ねえ……どうして？」

ジオは顔を歪めながら、小さな声を出した。

「思い……出したことが、あるから……」

なつは不安な表情でジオをみつめた。

「くそっ……！ 体が、動かね、え……」

途端にどおん！ と壁にぶつかる音が聞こえて、なつは顔をあげた。

ウイングは顔を歪めながら、膝を落としていた。

「ウイング……！」

その時、ふわりと生温かい風がした。

巨大な魔法陣が光をあげた。

光がシルエットを作りだしていく。

一番早く出てきたシルエットは、なつがよく知る人物の姿をかたどった。

「……みつっ！」

なつの言葉に、光から現れたみつはきよろきよと首を動かした。

「なつ！ よかった！」

言ってみつはちりと見知らぬ誰かに目線を合わせた。

「うわ！ 厚化粧っ！ ……ってどちら様？」

ディエナはほんの少し頬を引き攣らせた。

次いで出てきたクールヴェリアは素早く辺りを見渡してから、アレイシア姫の前に反射的に立った。

「何者だ？」

ディエナは何も言わずに辺りを一瞥した。

「……どこまで湧いて出てくるのかしらね、ごみくずは。こうなれば」

ディエナの体の光が、強くなっていった。

「ごみは一掃しなきゃねえ」

なつの体にぞわりと鳥肌が立った。

溢れだした光がこぼれ落ちて、天井の小さな瓦礫がこぼれ落ちる。

「ここを、破壊する、つもりだ……！」

「なつ……！」

ジオの言葉になつは言葉を失った。

状況を素早く察知したクールヴェリアは叫んだ。

「全員転移魔法陣の上に乗るんだ！」

「あつはつはつは！ もう遅いわ！」

ディエナの姿は蜃気楼のように薄れていく。

その姿が完全に掻き消えたと同時に、一際大きな光が洞窟の天井を貫こうと咆哮をあげた。

なつはジオを引っ張った。

クールヴェリアは壁にもたれるウィングを引き寄せている。  
「なつ！」

巨大な瓦礫がなつの頭上に迫る。

なつは強く目をつぶった。

青くて強い光が、一瞬にしてなつと一同を包み込んだ。

「……っ!？」

陽に暖められた毛布にくるまっっているような、そんな心地よさがした――

気づけば、全員が家の中で倒れ込んでいた。

「うつ……」

うつすらと瞳を開けたなつの前に、輝く緑色のまんまる頭が現れた。

「きゃああっ!？」

なつは思わず悲鳴をあげた。その悲鳴につられるように全員が飛び起きる。

「な、なんだ、ルルルか……びっくりした」

だが、なつ以上にルルルの方が驚いていた。

「びっくりしたよ……。無事だったんだね、なつ……」

みつは体を起こして辺りをきよきよと見渡した。

「なんだったの、さっきの……? それに、ルルルなんでいなかったの?」

ルルルは恥ずかしそうに自分の頭を撫でた。

「なんか……定員オーバーだったみたい」

みつは「ん?」と首を傾げた。

「ま、そんなのいいや。ところで、さっきのはなんだったの? もう、死ぬかと思った……」

なつとウィングは黙って顔を見合わせた。

やがてなつの代わりにウィングがこれまでの経緯を喋り始めた。話を聞き終えた一同はしばらく考え込むように黙っていたが、やがてクールヴェリアが口を開いた。

「あれで、四天王だと？　ウイルヴェールの手下にさえ実力が及ばないのか」

ウィングが何かを話そうと口を開きかけて、黙った。

その時、「ううん」と呻き声が聞こえて、一同はそちらに目を向けた。

「お前……！」

ウィングは剣の切っ先を盗賊——シアンに向けた。

「よくも散々な目に遭わせてくれたな！　このぬすつと！」

シアンは切っ先をみやって、苦い表情を浮かべた。

「待て、ウィング」

クールヴェリアが冷静につぶやいた。

ウィングは信じられないと言ったような表情をクールヴェリアに向けた。

「そいつが盗賊をしているのにも理由があるようだ」

「理由？　盗みを働く理由なんて……！」

「そいつは両親を早くに亡くして、妹と二人でいたらしい。ある日その妹と喧嘩して、そいつは家を飛び出した」

ウィングは不思議そうな表情を浮かべた。

「一年ほど経って、そいつは家に戻った。だが既にその時妹は病気で死んでしまっていた。それから、ここら辺に盗賊が出るようになった。そいつだ」

ウィングはシアンに視線をやった。シアンは苦い表情のまま俯いて黙っていたが、やがてぽつぽつと言葉を紡ぎ出した。

「……妹が死んだって聞いた時、後悔したんだ。あんなふうに家を飛び出したこと……。そんな時だった。あの変な女に遭ったのは」

「あの、厚化粧ばあのこと？」

「ああ、ディエナだ」

みつの言葉に、シアンは頷いた。

「奴は俺に上質な魔力石と王家の巻物を持ってくれば、妹を生き返らせてやると言ってきた。勿論、俺だってその言葉をそっくりその

まま鵜呑みにしたわけじゃない。でもあいつは俺の前で死んだ怪物を生き返らせてみせた」

ルルルは眉をひそめた。

「怪物を……生き返らせた？ それ、本当に？」

「ああ。俺も驚いた。それから俺は条件を呑んで、その日から盗賊になった。仲間なんていないから、俺一人だな。……ああ、それでも王家から盗みに入る時は、さすがに一人じゃきつかったから、協力者を頼んだんだが」

「協力者？」

ウィングの言葉にシアンは考えるように視線を下に向けた。

「名前は知らない……。ただ、体格の良い男だったかな。本当にたまたま出会っただけの奴だったから。それで、こうなったってわけだ」

シアンは自虐的な笑みをこぼした。

「死んだ人間は生き返らない。もし生き返るなら、きっとみんな同じことをしているだろう。俺だって……」

そこまで言って、ウィングは言葉を切った。手の中の短刀をみつめてほんの少し感慨にふける。

「それでも……それでも、会いたかったんだ！ 少しでいい、会って……謝りたかった」

みつは立ち上がった。

「死んだ人間は生き返らないよ。だから生きている内に、後悔しないように生きるんじゃない。だから、今が大事なんじゃない」

みつはシアンをまっすぐみつめた。

「私は、後悔しないように生きたい。後悔なんてしたくない！ あなたは、盗賊として生きることが後悔しない生き方なの？ ずっとそうやって生きていくの？」

「ずっと……？」

「謝るよりも妹さんに恥じない生き方をしたらいいんじゃないの？ 私なら、そうする」

「……」

シアンは黙ってみつをみつめた。

みつはぶいっと家の外に出て——がん！　っと扉に指を挟んだ。

「痛い！」

カッコよく決めたのが、台無しだとなつは思った。

「……あーっ！」

悲鳴の後に、外からみつの叫び声が聞こえた。何事かと考える前に、みつは思い出したように再び家の扉を開けた。

「な、なつ！　そいつ！　敵、離れて！」

なつはみつの指差した方向をみやった。不快そうに呼吸をするジオが、じろりとみつを睨んだ。

「あ、あの……大丈夫。多分……。ジオは、洞窟の中で私を助けてくれたから」

みつは目を丸くした。

「なつを……助けた？」

「う、うん……」

みつはジオをみやった。

「そう、なんだ……」

「別に、自分の獲物が他から奪われるのが嫌だったただけだ。他意は無い」

「なつのこと、食べる気！？」

「なんだかその表現、嫌だなあ」とは口に出来る雰囲気ではなかったので、なつは黙って二人の様子をみやった。ジオは肩をすくめた。「しばらくは……襲うつもりは無い。……お前の態度次第で変わるかもしれないがな」

みつはむっとしたようにジオをみやった。二人の視線が交錯する。

「あ、あのさ！　ちよ、ちよっとの間だけ、お互い停戦期間にしよう！　ね？　みつ」

埒が明かないような気がして、なつは二人に提案を持ちかけた。みつはしぶしぶ「いいよ」と頷いた。ジオは眠そうに視線を泳がせ

た。

「まあ、そういうことにしておいてやる」

ジオは音も立てずにゆっくりと立ち上がって、みつの横を通り過ぎようとした。

「あ、ちよつと……待って！」

なつはジオの後を追いかけてようと立ちあがった。みつの不思議そうな表情が目に入る。

「ごめん、ちよつと聞きたいことがあって……すぐ戻るから！」  
そう言っとなつはジオの後を追った。

「……俺の後を追ってきてどうするんだよ」

ジオは小さくため息をついた。

「せつかく、あの正義感の塊みたいな娘から離れられたと思ったのに」

「そ、そういうわけじゃないんだけど……」

なんとなく申し訳ない気持ちになって、なつは俯いた。ジオはその様子をじっとみやる。

「そんなに罪悪感持つなよ。別に俺の都合で怪我をしただけだ。お前とは関係ない」

「それは……そう！ それ、それを聞きたかったんだけど……！」  
ジオは眉をひそめた。

「どうして私を助けたの？ って聞いた時、思い出したことがあるっていったでしょ？ それが、なんとなく気になって……」

ジオはほんの少し困ったような表情を浮かべた。

「……多分、気のせいだ」

「……え？」

ジオは困ったように考え込んだ。

「俺も、あまり確信がもてない。俺はあまり内部には行ったことは無いから……」

なつには、なにがなんだかさっぱり分からなかった。ジオは否定

するように頭を振った。

「だから、あれは気にするな。代わりに別のことを教えてやるよ」

「え？ は、はあ……」

「お前、怪我には十分、気をつけた方がいいぞ」

なつの思考がいよいよ本格的に固まり始めた。

「……ん？」

「舐めてみて分かったんだが。洞窟の中で吸血怪物をみただろう。

あれは本来どんなに血液を吸っても、あんなに大きくはならないし、あんなに大きな魔力を持たない」

なつの頭の中で、洞窟の中での出来事が思い起こされた。

——なんとなく、恥ずかしい……

「え、えと、それで？ それ、どういう意味？」

「だから」とジオはなつをみやる。

「お前の血液あるいは内部に魔力がある。もしくは、それに同等する何かがあるということだ」

なつはただ首を傾げた。

「私に魔力があるってこと？」

「魔力、かどうかは分からないが……。俺だって分かんねえよ、それが何かは。けど、とりあえず怪我をしない方がいいぞ」

なつは不思議そうに考えながら、小さく頷いた。ジオはちよっぴり眉間に皺を寄せた。

「事の重大さが分かってないみたいだな。もし、強い力を得ようとしてる奴がそれを知ったらどうなる？ 例えば、ウィルヴェールなんか」

『ウィルヴェール』の言葉に反応するように、なつは顔をあげた。

「お前、狙われるぞ——」

それはまるで、不吉な予言だった。

なつとジオが家の中に戻ると、部屋ではなにやらひどく騒がしい声が聞こえていた。

「俺は反対だ！　どんな理由があるにせよ、こいつと行くのは気が引ける」

ウィングはそっぽを向くように顔を背けた。

「頼む！　俺だってあの女の被害者だろ！　一緒に行動してもいいじゃないか！」

シアンは叫んだ。

「人数が多い方が楽しいと思うけど……」

みつが軽くつぶやいた言葉に、シアンは飛びつくように跳ね上がって、みつの手を取った。

「……！？」

「さすが、勇者様！　心が寛大な上、美人だ！」

みつの顔が引き攣りそうになった。

「別にそういうつもりじゃな……！」

呆氣にとられたようにみつめるなつの隣で、ジオは意地悪な笑みを浮かべた。

「人数が多い方がいいなら、俺も同行していいってことだな。あんなの連れが怪我を負わせたせいで、しばらく獲物を取るのに一苦労だ。責任はとってもらうぞ、勇者さん」

なつは素早くジオをみやった。

「ちょ、さっき私のせいじゃないって……！」

ジオは素早くなつの口を手で塞いだ。

「文句があるなら今すぐ、この場で獲物狩りを始めるぞ」

「獲物狩りを始める体力があるなら別に一緒にいなくてもいいじゃないか！」とは、口が塞がれてて、なつには言えなかった。

みつはむむつと表情を歪める。

「いいよ、分かった。その代わり、絶対なつを襲ったりしないで！」

「よし！　決まりだ！」

みつの言葉に大声をあげたのは、ジオでは無くシアンだった。

「ちょ、君じゃなくて……！」

「じゃ、早速セルポリスに行くぞ！　さあ！」

シアンはみつの腕を引っ張って外に出た。「こらー！」というみつの声が聞こえてくる。

一同は呆氣にとられながら、二人の姿を見送った。なつは思わずルルルの方を向いた。

「一体……何があったの？」

「うーん……みつの言葉で改心したみたい。けど、そのテンションが変な方向に向かったみたいだよ」

ウイングはちよっぴり呆れたように肩をすくめた。

「違うな、あれは……。いい、もいい。早く行こう」

半ば投げやりに言っ、ウイングは短刀を懐にしまいこんで、剣を肩にセツトした。アーレイシア姫は、ちよっぴり意味ありげに笑った。なつが不思議に思っ、てアーレイシアをみやると、彼女はなつに向かつて手招きしてみせた。彼女は内緒話をするように、なつの耳につぶやいた。

「あの人、みつに惚れたみたい」

なつは思わずぽかんと口を開けた。納得したような、よく分からないような——とにかく、すごいと漠然と感じた。

こうして、今度こそようやくセルポリスに向かうこととなった。

泥棒追いかけて三千里 f i n a l (後書き)

今回はちょっと詰め込んだ感が……

次章、もう少し進行度を増せたらと思います。

読んでくださった方々に感謝をこめて――

## 魔王の青年はどこへ飛ぶ

セルロポリス——全体的にやんわりとした色調で統一された都市で、夕焼けに覆われた時のそれはひどく感慨深い気持ちにさせられる。宿屋や店はもちろんのこと、古風な店もあれば、新しい店もあり、その境界は無いに等しかった。

広場の前で、一人の青年——レイルは空を見上げた。今でこそ消えうせてはいるが、しばらく前には硝煙の臭いが流れてきていた。どこからのものか、推測はつきすぎて逆に絞り込めない。

「もう、ほとんど作業は終わったな。休むか？」

レイルは傍らにいるドラゴンの背を軽く撫でた。ドラゴンはくるつと喉を鳴らしてレイルに甘えた。

四方の者たちはドラゴンに驚いて近づかずの様子をみている。レイルは肩をすくめながら、もう一度ドラゴンの背を撫でた。するとドラゴンはレイルの腕の中に吸い込まれるように消えていった。

「いくら色んな人種がいる都市でも、さすがにドラゴンは人目を引くのか……。覚えておこう」

それから、レイルは辺りの人間に手をかざした。すると、何事も無かったかのように、人の群れは元に戻り、スムーズに流れを戻して行った。

レイルは広場を抜けて、古ぼけた時計塔に足を向けた。宿屋に向かうよりもドラゴンと一緒に休める時計塔の方が、実はほとんど人が来ない穴場だったのだ。

ちなみに時計塔の時計は、止まっている。壊れたのではなく、最初から止まったままなのだ。それでもそのことに文句を言う者も、苦情を言う者もない——時計塔自体を知る者はいないに等しかった。

レイルは時計塔の最上階に座ってしばらく目を閉じた。  
眠るような、不思議な心地で——

その頃、セルロポリスと目と鼻の先の森で、なつとみつはよろよると歩みを進めていた。

「ル、ルルル……もう、着くかな？」

二人の後ろでルルルが明るい声をあげた。

「うん、もうすぐ近くだよ！ セルロポリスなんてあまり行ったことなかったからなあ、どきどきするよ」

「どきどき……」

ルルルの言葉に、アーレイシアはほんの少し考えるようにつぶやく。気になって、クールヴェリアは彼女の顔を覗きこんだ。

「お城から初めて抜け出した時も、どきどきしたものだっただけなら。そんなこと今は考えてなかった……。不思議ね」

その言葉に、クールヴェリアはほんの少し瞳が揺れた。

「そういえばさ、セルロポリスは防衛国……いや防衛都市の一つなんだろう？」

シアンの言葉にみつとなつは首を傾げた。

「防衛都市？」

「ああ。ウィルヴェールも手が出せないいくつかの都市があつて、それが防衛都市。まあもちろん、他の都市にも防衛線となる何かがあるらしいけど、今もなお侵略されずにいる都市は、相当上の者が守っているって話だ」

シアンの言葉にジオはほんの少し眉をひそめた。

「やけに詳しいんだな」

「盗賊やってきてるとき、色んな人種と出くわすんだな。俺は知らない方だと思っただが、まあ盗み聞きつてやつ」

得意げなシアンの顔を、ウィングは呆れた様子でみやった。

「威張ることじゃないけどな。防衛都市だっていうのは知っていたけど、内部事情までは知らなかったな。でもまあ、そこまで俺たちが知る必要はないだろう」

「そうとも限らないだろ？」

シアンはほんの少し真面目な顔をした。

「物事は本質まで考える。俺もそんなにこだわってきた方じゃないが、今ならなんとなく理解できる。よく妹が……言っていた言葉だ」  
表情が読めないほどに巧みに、シアンは顔を背けた。ウイングはほんの少しだけ押し黙った。

一行は静かにセルポリスに足を踏み入れた。ゆつたりと溶け込むような時間の流れが、時計塔から漂っているような不思議な感覚に襲われる。だがそれも、感じる者はほんの一握りだった。

「なつ、時計塔があるよ！」

「本当だ」

二人の言葉に一行は目を丸くした。

「時計塔？ どこに？」

「え……ほら、あそこ！」

みつは勢いよく指を指した。ルルルは不思議そうに目をまたたかせた。

「何にもないよ？」

「え？ 一番大きく立ってるじゃない！ ほらあ！」

ジオは怪訝そうな表情をした。

「お前ら、頭大丈夫か？」

「はあ！？ 正常だってば！」

ジオの言葉にみつは思いきり反論した。

「そこに立ってるよね！ なつ！」

「うん……。よく分からないけど、他の人には見えてないみたいだね」

思いの外冷静ななつの言葉に、みつはほんの少しテンションを下げた。

「はあ……。変なの。あ、なつ、行ってみる？」

なつはほんの少し考えるように間を置いた。

「そう……だね。なんだか気になるし」

「じゃ、あそこの木の下で落ち合おう！　ってことで、またね！」  
みつはなつの腕を引いて、一行に手を振った。

「は？　お、おい、待て！　二人とも……って行っちゃったし」  
ウィングは小さく肩をすくめた。

「全く……危なっかしいな」

クールヴェリアの言葉に全員が大きく頷いた。

「つたく、俺も追いかける——」

「待て」

ウィングの言葉を制したのは、意外なことに、ジオだった。

「俺が行く。気になることがある」

返事を聞くより早く、素早く獣のスピードが後を追った。

螺旋階段を上がる間、やけに鼓動が大きく鳴った。

何かに誘われるような、引き寄せられるような——あるいは、引き寄せられたいかのような、不思議な心地がする。

みつに腕を引かれながら、体よりも先に、心の方が既にそちらに向かっているような気がした。

——いる。きっと。

何が、いるのだろう。何故分かるのだろう。理屈じゃない、直感——なのに、ただの直感じゃなくて確信にも似てる。

カードで例えるなら、ジョーカーが出るって漠然と感じていたらばつちりジョーカーが出たっていうような、妙な確信感——そしてそこにもっと別の感覚が混じっている。

感覚の名前なんて分らない。ただの感情とも違う。なんだろう、これは。

階段を上りきった最上階——ああ、やっぱり、と心が喋った。

だるそうに、それでもどこか優美なシルエットがこちらを振り向いた。

「——レイル」

思ったよりも小さな声が、自分の口から漏れた。

レイルは黙ってこちらをみつめた。目の色ひとつ変えない——まるで初めから、自分達が来るのを知っていたかのようなだった。

「……………」

ここだけ、隔絶された世界のように——みつまで、大人しかった。急に、かたん、と音を立てて、隣にいたみつが横になった。

「え……………」

驚いてみつに目をやると、レイルは小さくつぶやいた。

「少し、眠るだろう」

視線をレイルに戻して、困惑したまま口を開きかけた時——  
「なっ」

背後から声がかかって、振り向いた。

声の主——ジオは口を開きかけて、こちらをみて目を見開いた。  
いや、こちらじゃない——レイルを見ている。

「ま、………… おう、さま……………」

掠れたジオの言葉に、耳を疑った。

レイルは顔色一つ変えない。

「ま、おう……………」

頭が真っ白になった。

「魔王様………… いえ、シュヴァルツ陛下」

ジオは膝を落として、かしこまった。

「しゅば…………？ 陛下って……………」

レイルはため息を漏らしたまま、しばらく黙った。

「魔王………… そう、この世界では呼ばれている」

レイルはこちらをまっすぐ見据えた。

「レイル・ヴァンデル・セザンラルフ・シュヴァルツ——それが私の名」

## 魔王の青年はどこへ飛ぶ（後書き）

ようやく出せたなあという感がある章です。

ここからどこまで動くか、ちよっぴり難しい章だと思います。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5246/>

---

へたれ魔女と美少女勇者

2011年5月5日11時05分発行